

# 櫻痴



第六卷 第十號

東道弘館

首

婦人と子ども第六卷第拾號目次

卷 首

獨逸皇室の家庭

寫眞版

婦人と子ども

子どもと秋の自然界

牧 羊

幼兒教育の特色

和 田 實

通信事務

湯 淩 觀 明

實驗上の育兒

醫學博士 濱 川 昌 育

婦人と親族法

太 田 英 隆

短 歌

真 宮 起 雲

俳 句

鹽 野 奇 零

短篇小説「秋」 堀内 新泉 八

朝の西洋料理 石井 泰次郎 三

おん子 朝 露 生 三

名士の家庭 太 田 龍 東 二

學校と幼稚園

恩物管見 一 関 人 二

雜 錄

數 件

新刊紹介

數 件

子 ど も

三人兄弟 わたなべ 一

もみぢ ゆ き 子 一〇

庭 家 の 室 皇 逸 獨



## 會員募集

幼兒教育の必要にして缺く可からざるは今更喋々を要せず。本會は去る明治三十四年の創立以來孜々として斯業の爲めに常に科學的解決を與へんことを期せり。時恰も戰後に會し大に發展の必要あり。茲に會務を擴張して將に畫する所あらんと欲す。既に幼稚園事業にたづさはれる人は勿論幼兒教育に熱心なる諸君は奮つて御入會あらんことを希望す。

本會規則並に入會手續は表紙の第三頁にあり

明治三十九年十月

女子高等師範學校附屬幼稚園

フレーベル會

●會 告

本月十三日(第一土曜日)午後一時半より麴町區九段坂下なる精華幼稚園に於て本會例會相開き申すべきに付き御知友御誘引御來會相成りたく候

追て當日は家政學研究を以て英國に留學し今般歸朝せられたる宮川壽美子嬢の演説有之候に付奮つて御出席下され度候

明治三十九年十月五日

フレーベル會

會員各位

●ふ乞を記附御旨るた見を(供子と人婦)は節の文注御●

序

生先了圓上井  
生先歌田下

學文學女  
博習部  
士院長

生先郎次哲上井  
生先郎次勇良元

士博學文  
士博學文

# 山西 惣治先生編

中折不村伯画庭家樂三色版口繪插畫  
判六四形洋裝人頗美本紙數百頁來舶上等紙摺

## 好大評初版忽賣切賣再版發版賣

正價一圓十三錢 郵稅五十錢

家庭代末の寶典 視する勿れ

就等にて順家庭

家庭組織法

婚姻制度に配列

道交禮

苟くも事説明

宗德式家

事務書類に熱心

教經行

事務書類に熱心

濟裁縫園

事務書類に熱心

養育園

事務書類に熱心

茶音游藝

事務書類に熱心

道樂工藝

事務書類に熱心

育通品

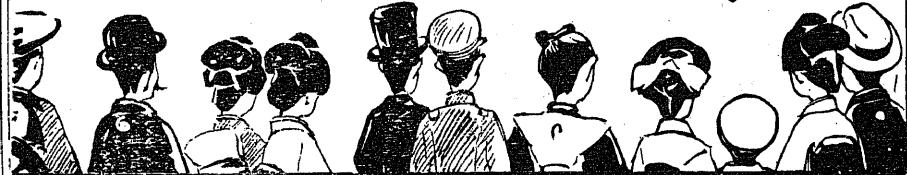
家庭問題は今に残されたる社會問題として又戰捷後必  
然に社會の要求する時代急需の聲に應ぜんとて世に出  
づる家庭向の著書取て尠きにあらず尠からずと雖も惜  
むべし一時的際物の零片を充たさる即ち編者此に周到  
の用意多大の苦心抱負を以て本書を総纂せられたれば幸  
家庭は此れに依て光明に浴し新しき福音に接するもの

専からざるを信す幸に世の流行的一夜作の駄編と同一



# 日本家庭辭書

前付の二



電京語日本橋南大工町一〇二八四

發行所弘道館

# 好評噴々たる遊戯書

廣島高等師範學校教師吉田信太先生作曲  
廣島高等師範學校教師原藤藏先生作詞

(好評七版發賣)  
○近刊本書と類似の者刊行  
行者名は著者名と  
混淆する勿れ

## 國定唱歌遊戲教授書

洋裝菊版  
色クロース  
無類の美本

尋常科の部 全一冊 正價金八拾錢 郵稅拾錢

高等科の部 全一冊 正價金八拾錢 郵稅拾錢

▲讀め 唱歌遊戲教授に新光明を發とする教育家は  
▲讀め 訓育上、體育上、効果を顯するの教育家は  
▲讀め 戰後に於る勇健の國民を養成する教育家は

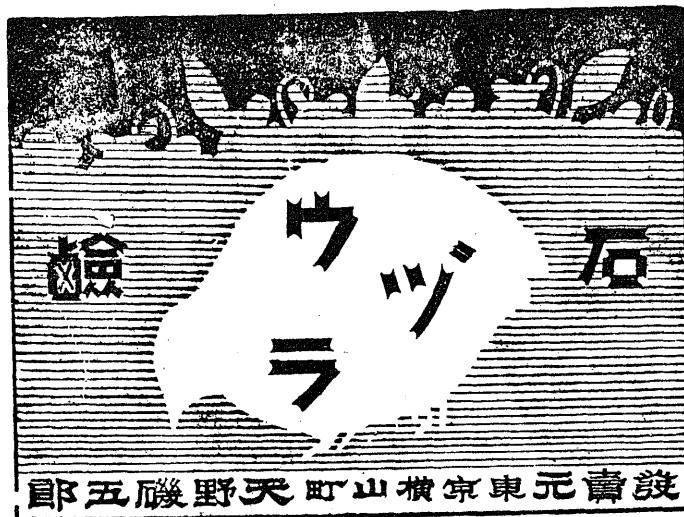
## 尋常科第五版第六版購求者に票告す

曩に發行せし第五版第六版は弊館印刷所三協合資會社に印刷せしめ既に賣  
切の處其後該兩版の内間々間違あるを發見致候に付右訂正之爲先般來著  
者に乞ふて精密なる修正を遂げ今般修正第七版を發行仕候に就て  
は右第五版第六版御購求せられし方は御郵送被下候はゞ早速  
可申此段稟告仕候也

東京電話二八〇番大四八南工町一  
發行所 弘道館

●ふ乞を記附御旨るた見を(供子と人婦)は節の文注御●

質品るな良純



香の香麝るな良佳

(新) 女子修養叢書

日本女子大學校教授松浦政泰先生著 ▲紙數二百頁 ▲總ふりがな付

娘と妻と母

菊判全一冊  
總クロース  
裝釘最美麗  
郵稅不要  
定價六拾錢

著者  
一千年の實驗を基礎とし内外古今  
藝業と業とを説き次を  
の學問體操遊戲修養題職業問題  
婚姻男女交際問題  
勤婢僕使に對す心得  
寡婦なる者は勿論  
○發兌元東京本町  
金港堂式會社 ◎  
大阪市東區北久太郎町  
金港堂支店

八十名家の卓說を引用し始めて女子の智と體と徳と理想の家庭をして其間女子  
母の寡婦ち終りに分巻に分  
寡婦の心に對す心得  
少女教育法惡兒矯正法隱居再婚老後の如き千百の女子問題家庭問題女子  
父兄たる者必ず一讀  
家庭家訓家憲の如き千百の女子問題家庭問題女子  
寡婦娘妹を有する者  
○發兌元する者必ず一讀  
金港堂式會社 ◎  
大阪市東區北久太郎町  
金港堂支店

# 經濟的家庭染料

◎ 特色 着色堅牢、色澤鮮廉、染法簡易、價格低廉

志ろと用改良をめこ

東京  
販賣  
元舟

定價  
(半反用)

大壠拾壹錢

小壠六錢



賣捌所は全國種染料店、小間物、流物店小あり

みやこ染  
は専門技師が多年苦心の結果發明せし完全無二の素人用化學的染料にして、絹綿毛麻其他に  
みやこ染  
は着色堅牢なり  
みやこ染  
は染色自在なり  
みやこ染  
は染法簡易にして何回洗濯するも決して變色褪色等の憂なく、又染粉の爲に地質を損する事  
みやこ染  
は體裁優美なる擣入にて永久貯えんも變質の憂更になし  
みやこ染  
は價格低廉にして普通染質の半額だも要せず  
みやこ染  
は以上の特色を備ふるが故に江湖の家庭に愛用せらる

東京市日本橋區小舟町一丁目

みやこ染發賣元

青山染料商店  
電話浪花二九五八番  
郵便振替貯金口座三九五番

▲ からだよわき人例へば性來虛弱にて瘦せ細り或ひは病後の衰弱。老衰。貧血症。神經衰弱。心臓病。動悸。息切れ。肺病。○婦人血の道。殊に産後の経過不良症。其他氣力減乏症。平素身體薄弱

良薬の味美き易し用服



の爲め病に罹り易き人。過度に身體或は精神を費す人等は此「大木五臟圓」を服用して見給へ

▲ 药價 卅五日分二圓、十五日分一圓 七日分  
五十錢、四日分三十錢、二日分十五錢 ▶

本舗 東京兩國米澤町 大木口哲本店  
發賣 東京神田鍛冶町 大木合名會社

○全國藥店にあり大木五臟圓に注目を乞ふ

文學士 北澤定吉先生著

◎再版

# 伊人耶穌

洋装菊判  
全クロース美本  
正價金七拾錢  
郵稅金八錢

神祕説に同情を有してしかも知識を輕視せず、基督其人を教仰して、しかも基督教徒たらず、專心哲學を究めて宇宙の繼を解かんと欲す、かかる立脚地にある著者が、銳き批評眼もて四編學書を精讀し、『人としての基督は如何なる儀表を與ふるか』てふ趣味ある問題を究めて、新しき解釋を基督其人に與へしあ本書なり。基督の人格を中心として、基督教の倫理を説き、實踐道法を論ず。議論正大文章優雅、讀まば正さに基督を地下に起してこれと語るの感あるべし。先づ己自らを修養し、身を以て弟子を率ひんとする教師諸君は、本書に於て好指導を發見すべし。

發行所

東京市京橋區南大工町一番地

弘道館

(電話本局二八四〇番)



# 婦人と子ども 第六卷 第拾號

## 子供と秋の自然界

暑い暑いと言ひ暮らした夏の日も、過ぎて見ればつかの間で、何日か肌涼しい秋の景色となつた。春の景色の麗かさはないにしても、一年中、清らげき天地は實に昨今の自然界である。爛漫たる春の花は見られないが、清楚たる野邊の千草は又一段の風趣がある。

幼稚園の創設者フレーベルといふ人は、子供を教養するに、少くとも一日の中一時間、一週の中一日は野外に連れて出て、自然の間に自然界と接觸させたいと書はれた。この事は子供の教育上精神上に取つても必要だが、殊更身體上に取つて極めて必要である。田舎の子供が顔の色から身體中、赤黒くなつて、生々した血に充ちて全體逞しく出來て居るのでに比べると、東京の子供は、大抵は青白くなつて貧血で神經過敏に出來て居る。肉色のよい子供は實際まことに少ないものである。而してこれを醫すに、最も有効な方法は、なるべく自然界の間に遊ばせることである。その時は、何時でも宜いが、就中今の時が最も適當である。で、東京の様な都會に棲む吾々は、若し一日一時間といふことが出來ねば。一週の中土曜日曜だけでもよい、この清らかな昨今の自然界と愛らしい子供等とを接觸させたいと思ふ。電車なり汽車なりを利用すれば、隨分遠くへ出られるから。(牧羊)

## 幼児教育の特色

和田 實

單に學校教育と家庭教育とを比べても兩者に特色あることは云はでもの事ではあるが、殊に此幼児教育と通常の少年を教育するのとは大分違つて居る所がある。一寸考へると教育に二色はない筈であるから同じ教育に有益な事なら誰にも害のあらう筈はないと思うが、思はれないでもないが是は大なる誤りで實際は適當な時期に適當な仕事を仕向ければ何の役にも立たぬ許りではなくかつて有害な結果を生ずることになるのである。然らば幼児教育には何んな特色があるかと云ふに第一には凡べて幼児教育上の仕事は大きな子供に課業的に強いても行らせるとは違つて全然遊嬉的であることである。一体幼児と云ふものは、食ふこと、寝ること、遊ぶこと三つの外に生活はないものである。故に一寸見ると何か作つたり、學んだりする様に見えても夫れは皆遊ぶ爲めに行るので決して大きい子供の様に課業だからするなど

云ふ譯には逆を行かないのである。従つて其教育の材料も手段も悉く遊嬉を離れることが出来るのである。一口に云へば幼児教育と云ふものは幼児の遊嬉を種々に取り扱ふ事によりて其体育を計り心的發達をも誘導するものである。勿論小學校時代の教育にも遊嬉は必要なものであり有効なものもあるけれど併し小學校時代以上の教育には遊嬉以外教育の材料も手段も澤山あつて決して遊嬉ばかりと云ふことは出来ない。然るに幼児には事実幼児と云ふものは此遊嬉に依つてのみ發達して行くものである。故に幼児教育の特色は其材料も手段も遊嬉の範圍外に出でず全然遊嬉的であることである。

第二には幼児教育は記憶的學習的ではないと云ふことである。幼児の教育が遊嬉的であることが認められる以上は是は當然の順序として認めなければならぬことである。一般に子供は能く人真似をする、そして人の動作言語を摸倣し朋友の技術を摸倣するものであるから外觀では恰も子供は期

くして熱心に事物を學習し記憶する爲めに活動して居る様に見えるが決してそこではないので實は面白く遊び樂しく暮さんがあつたが爲めに努めるので若し夫れが思つた程に面白くもなく樂しくもないものなら子供は忽ち止めてしまうもので決して自ら學修を記憶せんと意識しては居ないのである。故に幼兒の教育は凡て懶怠的嬉戯的のものであるといふはなければならない。従つて子供を遊ばせて居る時、或は子供に話ををして遣つて居る時、今一步進めば話もまとまりがつく教授としても完全するなど考へて無理をしようとしても子供はなか／＼承知しないで興味がつきればドシ／＼去つてしまふと云ふ風である。此邊の具合を心得て居つたら子供を扱ふにも便利があるだらうと思ふ。

第三には幼兒教育の大体は保護的にして鍛練的なと云ふことである。其心身がかよわくて動もすれば損じ易いものであるから、少しでも無理をする譯に行かないものであるから何かにつけて控目なる。それに外部に對する抵抗力が少ないのであ

るかち危険に遭遇することが頗る多い從つて常に之を擁護する必要がある。即ち幼兒教育は保護的であると云ふ次第である。併し保護ばかりでは何時迄縱つても子供を強くすることが出来ない、子供を強くするには之を鍛練する必要がある。鍛練と云ふと無理と云ふこと、衝突する様にも思へるが是は程度問題であるし夫れに子供の趣く方向に子供を強くすることは之を鍛練するには之を鍛練する必要がある。即ち幼兒教育者としても子供を鍛練的に添ふて鍛練的に進むと云ふことは決して六ヶ敷いた事ではないから幼兒教育者としても子供を鍛練的に扱へぬと云ふことはない。希臘の哲哲ブラーも云つたではないか「一定の遊戯を變更することなく繼續させたならば夫れは以て陶冶の手段とすることが出来る」と此言葉は延きて生理上にも適用することができると思ふ。

第四には學校教育は多數の兒童を同時に取り扱うことに於て一特色を持つて居る、命令も一般的に示すことが出来る。けれど幼兒教育に於て得るに於て一特色を持つて居る、命令も一般的に發する事が出来るし動作上の模範も同時に一般的に示すことが出来る。けれど幼兒教育に於ては之れは殆んど爲し難き處である、従つて凡てが個人的に取り扱はなければならぬと云ふ必要

性々々に應じて適應の處置を探る必要がある。要するに幼兒教育の特色とも云ふ可とは一般に遊嬉的娛樂的、保護的である。而も個人的鍛練的であると云ふことである。

法律が立ち過るとか云つて反對される譯である。兎に角幼兒教育者は其教育と夫れ以上の教育と如何なる差別特色を有す可かを常に心得て保育し誘導したならば決して世人に兎や角云はれることはなからうと思ふ。

從來我國の幼兒教育は餘り嚴重に過ぎ威嚴に過ぎ禮儀作法に傾き、課長的に傾いて居つた。武家教育と云ひ寺子屋の教育と云ひ何れも之を證據立てるものである。是は一方に邦人の眞面目なる氣風を表出するもので歴史的には誠に結構な事であり、且又我國今日の發展も實は國民が此邊の氣風に因するものと思へば過去は決して咎められて居る今日以後の教育には決して取る可きものでないと思ふ。然るに明治維新以來今日に至りても未だ中々に此嚴格主義や課業主義に氣付かずして居る人が多いので動もすれば幼兒に無理をして得意で居るものがある。従つて幼稚園などに子どもを出すと早熟して不可いとか神經が過敏になつて困るとか云ふ攻撃や餘り物を教へ過ぎるとか

今から一年前に、ゴルドン、セルフリッヂといふ人の娘で名ロース、バッド(薔薇の芽)と呼ぶ可憐なる十二歳の少女が、米國のシカゴで、其幼な友達の爲に「は、き」と題せる月刊雑誌を發行した所が意外の成功であつたので、此の上へは一層の事に倫敦で發行しやうと思立其父と同道ではるばる同地へと赴いた同雑誌は現に今でも發行して居るか四頁に附録添へといふ体裁で去る七月の號には白堀宮(米國議會)の寫眞に横一文字に「The Will o' Wish」の盛運を斯る、一九〇六年四月十二日、テオドル、ルーズベルトと米國大統領の自筆で書いたものが附録にしてあつた。廣告も澤山あつて却々うまく編輯がしてあるさうだ。

通信事務

湯淺觀明

通信の事務を爲

無針

凡そ何所の家、何人たりとも、通信の事務を爲  
さぬは無かる可し、通信の必要なるとは、猶ほ衣、食、住の缺くこと能はざると同様なり、されば我が憲法に於ても、生命、財産に相次いで、信書の重んぜられて召る所以を知る可なり。  
人文の發達するに連れて、通信事務の頻繁に成り来るとは、争ふ可からざる事實なり、子供同士が無邪氣な手紙の遣り取りより、青春男女が戀路の仲介となるり、玉章、さては日常實用の通信、秘密に屬する物、責任の係るもの、その種類に數多あるべけれど、要するに、用事一方の實用もの

と、それに多少の情味を混ぜたる物と、今一つは趣味娛樂のものが、現時一般に行はる、通信と云ふものなり。

一口に通信と云はゞ、何の造作も無いやうなれど、ちょいと氣取らうとするには、隨分六ヶ敷いものなり、

近來、通信文の作りやうに就

て、大部研究する人あるやに聞く、手紙の文章も、なかなか軽んずるとは出來ぬものなり、

字をも見苦しからぬやうせざる可からず、一通りの書式通

りに遣つて外けるをば、誰れにでも出来るとは云ひ難し、

それゆゑ官署、會社など、多

数の通信の往復ある所にて

は、通信許りを取扱ふ通信員、専任者を使ふととは成り居れ

り。又は書記とも云ふ、

病氣見舞ひの手紙ならば、文章に霸氣活氣を帶びさせ、聽いて居る病人は勿論のと、讀んで居る看病人も、不知不識勇氣が出て、自ら元氣を覺えると云ふやうに綴るは云ふまでも無く、その文字も、墨を濃く、肉太に、字が跳つて居るらし、されど、この調子を以て、悔みの手紙を書いては不可なり、悔みの手紙は、先方の愁歎に同情の意を表するもの、一通の手紙で、共々に泣いて居りますとの意を現はすものなれば、文章に悲哀の情を込むるは云ふまでもなく、文字も、墨色を極めて薄くし、字を細く淋しく、如何にも墓無さ

散水

相な鹽梅式に認むるが、本統の法式なり、世間、かゝる法式を用ゆる者は無く、よし氣を利かして應用したるとして、氣の利かして有る所を酌んで呉れすべ、間の抜けたる手數倒れと云ふ可く、今時こんな馬鹿丁寧な事をする者は非ざる可し、このやうな事共を、少く年時代に教へられたる余とても、教へて呉れられた師匠へのみは是非無けれど、その他の人に、一度もかかる法を用ゐたるとは無し。

時代の變遷に伴へて行かずばならず、餘んまり古風なとを云ふては居れず、字を書くとて本式の筆法で遣つて行かんには並本抵のとでは出來はせず、今は眼に一丁字無きは無く、自公來得ぬと云ふやうな昔とは違つて

六

たれど、只實用のみに用ゐられ、古人のやうに、書道の趣味を解する人と云ふが如きは、殆んど無かる可し。

書も、研究すればする程容易では無し、たとへて云はうなら、「垂針垂露」〔散水聚水〕の筆法の如きは、今人また之れを顧みぬ勝ちなり。

「下」字の垂露、一目瞭然、その區別を見るとを得ん、若し、この垂針垂露を、反対に用ゐたらんには、誠に不格構な形とはなる可く、その石形構を取る人を、字の下手な人とは云ふなり。

次に散水聚水とても同じと、例の示す筆法にて知らる可し、同じさんずい偏にも、散水あり、聚水あり、正しき筆法に據つて書くには、區別を知つて何の字は散水、何の字は聚水なりと云ふを得て居らねばならぬ理けなり、「流」字〔溪〕字の偏が、判然と見分けられるに非ずや。

讀者、若し志あつて、斯道の研究をし、趣味を解せんと欲せば、専門家には書物に就きて、研

究し趣味を受けらるゝも妨げは勿らん

途中から話が横へ外たり、逆戻りして、さて、余は思ふ、今日の社會では、通信を娛樂視してはならず、但し繪葉書は別なり、通信は純然たる一事務と心得ふ可し、骨董好きの邦人は、猶ほ手紙をすでも骨董扱ひにするの氣風が去らず、余も手紙の趣味を知らぬには非ず、古き書簡、豪い人の書簡と、寫眞で見てさへも、珍と思ひ、なつかしく思ひ、寶として保存したく思ふ程なり、しかし、此の如きとは、滅多に無いととして差支へはあらず。

通信を事務と心得、事務扱ひにせずば、不便で堪らず、團隊に於ては専任者を使ふ、一家に於ては、通信は亦、家政の一事と見做さる可からず、斯くするには、先づその形式をなる可く一定の型にしたきものなり、殊に用紙をば略ば同じ位ひの者と改むるが便利なる可し、この便法の現に行はれつゝあるも妙からねど、まだ普通一般には、『状紙』〔卷紙〕なるものが用ゐられて居るのなり、先づこれを改めて、今流行始めの『書簡用紙』〔書簡

筆」と云ふを用ゐるが宜し、卷紙は、取扱ひが不便なり、その不便さは、書簡箋を用ゐる初むれば直ぐに譯る可し、取扱ひのみならず、保存する場合には尙更不便を感じず、些細なとのやうなれど、事務的経験より、余は、經濟、整理の二つから考へて、讀者に勧告するものなり。

通信は迅速を尊ぶ、前略御免の前書きをしながら、陳ば時々下云々の挨拶を永々しく述べて、肝腎の用事を記すの要領を欠けるもあり、依頼ごとのあるのならば、そのとを明白に記せば好きに、泣きでとを綴り、あはれを乞ふとに終つて、依頼の筋の立たぬがあり、返事を出す可きものを催促を受けるまで打ち遣つて置く無責任者もあり、返事を促しながら返信料を添へぬ勝手者もあり、しかるは如何に、邦人一般が通信事務の不慣を、今少し手早く要領を得るやうにしたきものなり。

余は曾て某所で、通信事務を取扱ひたるをあり、此等は殆んど普通のとさせられて、怪まれるは如何に、邦人一般が通信事務の不慣を、今まで毎日々々來る澤山の通信を始末して行くとは、初の内は面倒臭いものかなと歎息したるをもわりし

が、少しぐれで來て見れば、何んでも無いと思ふに至れり、先づ通信來たらば、一讀す、讀んで用の無きものと知れば、その儘剪刀で二つに切つて肩籠へ投げるなり、用件のあるものは、その要領を帳簿に記入して置くなり、勿論帳簿には、來信日、摘要、發信人居所氏名の記入欄が設けてあるのなり、そして記人が済めば同様に肩籠に投げるのなり、何人から來る通信にても、用事だに済めば、直ちに肩籠に放り投げるなり、されど後日参考にせねばならぬ程の通信ならば、或る期間の間は、保存して置くは云ふまでも無し。又、發信の方は、書簡箋を爲換券の様に二つに断れるやう作り、一方大形の方は先方へ届け、残りの小さきには、摘要を記して手元に保存して置くなり、この法は便利にして、澤山な通信を取扱ふ所ならば無論のと、一家庭に於きても、速に採用實行して、利益ある便法ならんと信ず。以上、余が實驗より、何所の家、何人にも容易に出來て、得策あると思ふたる要點を、走り書きして見たのなり。

## 實驗上の育兒

醫學博士  
瀬川昌耆

▲断乳の二時期 乳放れの時期は各國の習慣で  
朝れも一定して居らぬが、我が日本の如きは隨分  
断乳時期の永い方であります。併し乳汁は生後永く飲ませると乳汁の營養は次第に稀薄になつて來ます、併し稀薄になつた乳汁だからとて夫れを永く飲ました處で其の乳汁が小兒の害とはならないのです。断乳の時期に就いては二通りあつて第一の場合は母親なり乳母なり授乳者からして断乳すべく仕向ける時期と此の二様の場合であります。

▲母親の妊娠せし場合 小兒をして自然に断乳させねばならぬ時期と云ふは即ち母親の妊娠した場合を云ふのです、御承知の通り妊娠すると乳汁が出なくなるから小兒の身体には變化を起して來るので、生後一年内外では未だ乳汁を飲まなければならぬ時代です、然るに乳汁の量が少なつて

來れば勢ひ夫れに代用すべし營養物を與へなけれ  
ばならない、今でこそ牛乳にて養育し得ることが  
出来るけれど昔は牛乳保育の方法もなく據ろなく  
無理と知りつゝ食物を與へるやうなことになりま  
す、可愛さうなもので斯うなると小兒は稍もする  
と胃腸病を起して、生れもつかぬ虛弱な兒になる  
ことがあります、俗に斯ういふ小兒の病氣と腫肝  
と云つて身體が細つて衰弱して仕舞う、俗間には  
小兒に對して種々の病名を附けてある「虫を起す」  
と云ふこと括は母親から屢々耳にするところです  
が虫を起す事に就ては後に詳く説明いたしませ

## 乳 斷 と 其 方 法

△他の食物を求むるの嘔吐を引續いて述べ  
ませう、小兒が自然断乳せねばならぬ時期は前に  
申した通りですが、第二の場合即ち母親なり乳母  
なりが小兒をして断乳するやうに仕向ける時期が  
ある、夫を茲に説明致さう、元來小兒に際限なく  
不規則に乳汁を飲ませて置くとは至極可くなき事  
です、殊に生後一ヶ年以上になると母乳一方では

營養が少くなつて到底養育の出来ないもので、故に此時期になると、小兒も自然と他の食物を欲しがるやうな譯になるし、又食物を少しづゝ與へなければならぬ時期になります。

▲断乳時期の経過西洋では断乳の時期を示すに小兒生後一年以内が宜いと云つて居る、去れど日本にては未だナカノ夫れが行はれぬと云ふものは日本では舊來の習慣で、前にも云つた通り永く人乳を飲ませつけてあるから、其の習慣を追つて何うも未だ小兒が人乳を飲みたがるものと無慈悲に乳を放すのも可愛想だ」と母親も爾ういふ考へをもつて居るし且つ老人でもある家庭では尙ほ更ら永く何時までも授乳させるやうな次第になりますから何うも生後一年以内の断乳は今日の場合に行はれ難いと信じます、故に私は断乳の時期は生後一年から一年年の間に徐々と乳汁から食物に移り『マア何時の間に乳放しになつたらう』と云ふやうな方法で丹精される事と希望するのです、爾うすれば小兒の消化器に何の故障なく、發育上にも障害なく美事に断乳時代の経過するに至ります。

▲断乳の方法断乳のことは此の通りに實行なれば差支へないのですか其間には色々の御質問が起ります或る親は斯う云ふ御質問がありました『母乳を廢めて仕舞つたら牛乳も廢めなければなりませんまいか』と云はれるので、乳汁を廢めたから牛乳までお廢めなさいと云ふ理由ではないですか牛乳は小兒が一日に飲み得られるなら二合乃至三合位の程度まで飲ませる方が可いのです、小兒が二歳になつても三歳になつても其通りになさるが可いのです、又斯ういふ御質問があります『一年半位経つてもナカノ小兒が乳房を放さないで困ります、断乳させる良法はありますまいか』と云はれるのです、一体母乳は飲ませへ仕なければ出なくなるのです、然るに断乳させる時期にはまだ乳汁が出るので、出る乳汁を持つて居ながら飲ませぬのは困難に相違ありません古來より斯ういふ場合には乳首へ唐辛をつけたり、芥子を着けたりする之れも一つの方法ですが乳房へ綿帶をする杯は良い方法で實驗上是れで断乳の効を奏し

ました、又害にならぬ膏藥を貼つても可し何にせよ小兒をして乳汁を飲めば苦いとか辛いとかして懲りさせるのも断乳法の一つであります。

▲牛乳の保育多し  
母親が病氣に罹つて母乳を與へられぬとか、或は生來虛弱なる体质の爲め乳汁が非常に少量いとか事情によつて乳母を得られぬとか云ふやうな、總じて人乳をもつて小兒を養育し能はざる場合には、止むを得ず牛乳を以つて養育しなければなりません、世間には色々な事情の爲め牛乳にて養育する者は澤山見受けます、人乳で育てゝさへ経験無き母親は隨分迷つて、何うして育てたら可からんと手に餘ることもありません、況して牛乳をもつて保育するには疑ひも起らうし、迷ひを生ずる事も多からうと信じます、依つて牛乳保育の方法を述べて御参考に供しませう。

▲脂肪質は薄くなる  
成分の成分の比較は前に述べてある通り牛乳の成分の方が人乳より蛋白質と鹽分質が勝つて居ま

事は既に御承知であります、一体蛋白質は消化し易いものか又消化の悪いものかと云ふに、是れは消化し終る迄に比較的長い時間を要するから消化は良くないのです、牛乳を薄めもせず其儘飲ませると、小兒は此の蛋白質を充分に、消化し得ない事になるのです、故に安全なる方法として牛乳を水をもつて薄め、夫れへ砂糖を加へると稍人乳に近き成分となるが、其内の脂肪文は減少する事になるのです、西洋では新らしい純粹の脂肪を夫れへ加へて不足の脂肪を補ふ事もあるけれど、日本今日の状態では純粹の新らしい脂肪を得ることはまだ困難であります、故に素人が下手なことをして脂肪を殖して飲ませるのは却つて危険が多い、夫れよりは脂肪質の薄い儘與へる事が遙に優つて居るので、之れは薄めた儘にして置いて危険のない方が可いのであります。

▲牛乳の薄め方  
一二週間は、牛乳一合と水三合の割合に薄めるのが一般的の規則であります、併し人によるところでは薄す過ぎるから牛乳一合と水二合の割合

## 婦人と親族法

太田英隆

にする方が可からうと云ふ説を唱へる者もあるけれど、總て斯ういふ事は杓子定規には出来ない、必ず一分一厘でも多過ぎたり、少な過ぎたりしては小兒の害になると云ふやうな开んな理屈責めの理由は無いのです。牛乳を飲ませる上に於て少し位の酌度は差支へないのです。人の身体は左程六ヶ敷いものでなく餘り保育者が心配仕過ぎると夫が却つて障りとなることもあります。デ薄め方が生後の年月によつて換へなければなりませんが、小兒によつて消化力は異なるもの、之れを飲ませて胃腸病を起すやうなら其の薄め方は尙醫師に就いて必ず御相談なさい、先づ一般の薄め方と飲ませる分量は次ぎにお出し致しませう。

(つづく)

▲白髪を黒くする法 瑞西の或る科學者は此程X光線を應用して白き馬の毛を變じて黒色となすとか得たるより同一理法に依りて人の白髪を黒色に變ずることを得べしとなし且下切りに研究中なりと云ふ

第二節 養子縁組  
養子縁組は我國古來の習慣でありまして、後には法律で此制度が定めらるゝ様になりました、今養子縁組が行はれた原因を尋ねますに、左に掲げまする三つの理由から來てゐる様です。  
第一、宗教上の必要から來てゐるもの、之れは祖先の祭祀を斷絶させないと云ふ所から來たもので、今の人より昔の人の程此觀念が強い様です。  
第二、族制上の必要から來てゐるもの、之れは世嗣をはすべき實子のないものが、其宗名を断絶するを避け様とする所から來てゐるのです。  
第三、經濟上の必要から來るもの、之れは家督を相續すべき男子のないものが、其家産を相續し、之れを整理せしむるために、養子をするので、族制上の必要から當然來るべき理由なのです、右の理由を考へますに、養子縁組と云ふもの一家が一國の原素である家族制に固有の制度であ

りまして、歐羅巴各國に於けるが如き、個人主義の國に於ましては、全く成立つとの出来ない制度であります。それではありますから、英吉利を始め、和蘭、瑞典の如き國々にては、全く此制度を認めません、只僅かに此制度の、殘つてゐるのが佛蘭西、獨逸、伊太利等の國々であります。が、之等の國々に行はるゝ養子の目的は、老年に至りて子を設けないもの、又は子を失ひしが其心を慰める爲めか、又は幼者を保護するが爲めに假りに親子の關係を結ぶものでありまして、其養子は依然、實家との關係を絶たないで、實家の一員としての、權利をももつておるのであります。こう云ふ様な有様でありますから、歐羅巴に行はるゝ養子の制度は、一つの虚飾であります。先きに述べました、三つの原因に基いてると云ふことは云へません、佛蘭西が養子制度を採用したのは、全く政治上の意味から來たので、彼の革命時代に羅馬の共和政治に心酔した結果、遂に家族制度まで、法律で似ねる様になつたのです。それで、今日歐羅巴諸國では、養子制度は自然に

理に反するから、之れは廢止すべきものであると云ふてをりますが、我國でも、斯様なことを説く人があります。が、我國は御承知通り家族制を國体としてをりますれば、其原素たる人を永遠に保存し、祖先の祭りを絶たぬことが肝要であります。それ故に、我國では養子制度を維持するは極めて必要のこと、存じます。

### 第一款 養子縁組の要件 第一項 實質上の要件

第一、縁組の意志、  
養子縁組は、法律上の手續によらなければならぬことは云ふまでもないことで、法律の定めます。ところによると、養子になる人は養子縁組をしようと考へがなくてはなりません。法律上の語で云へば、承諾の意志を表示する能力がなくてはならぬと云ふことになります。所が此場合には二つの例外規定があります。一つは満十五年未達せないものが、養子とならんとするときは、父母が代つて承諾の意志表示をすることが出来るのと、他の一つは配偶者あるものが、配偶者と共に

に縁組を爲さんとするとき、承知したと云ふことを表示することが出来ない場合に、他の一方が雙方の爲めに意志を表示することです。

## 第二、縁組の資格

(一) 他から養子となさうとするものは、成年に達しなければなりません。

外國の立法例によりますと、その多くは養子制度を以て實子のない者か又は之れを失つた者を憫むの趣旨に基きまして、通常實子を擧げることの出来ない年齢した者、即ち四十歳乃至六十歳の年齢に達せなければ養子を爲すとを許しません。そうでありますと吾邦に於しましては、單に實子なき者を憫んで養子制度を認むるに至つたものではありませんから、養親が成年に達せばよいとしたのであります。

(二) 養子を爲す者は養子となずべき者の卑屬又は年少者でないことを要します。

養子は之を以て實子に擬しその間親子の關係を生ずるものでありますから、已れより年長の者を養子とすることは自然に反しますし、又尊属の

中には養親より年少なる者(叔父母の如き)もありますが、こんな人を養子としますときは、尊卑の順序を紊乱しますから、この制度を定めたのであります。

(三) 男子を養子とする者は法定の推定家督相続人たる男子なきことを必要とします。但し女婿となす場合はよろしいのです。

既に家督相續人たる男子ある者が更に男子を養子とするは極に必要がないばかりでなく、之が爲めに推定家督相續人たる者の権利を侵害するの弊があるから、その上男子の養子を許さないのであります。併し男子の場合でも女婿の如き、相續人の権利を侵害する虞がないものなくば、少しも差支へがありませんから男子を入れても妨げがないのであります。

(四) 養子を爲さんとする者はその後見人でないことを要します。

若し後見人が被後見人を養子とすることを許すとせば、被後見人の財産に付さ不正のことをしてしまひ、之れを俺はんが爲めに自分の養子として罪

悪を免れうとする者が出来ますから、法律はこの弊害を豫防する爲めに斯く規定したのです。

(五) 配偶者ある者はその配偶者と共にせなけれ

ば縁組をすることは出来ません。外國に於きましては、配偶者ある者でも獨立して養子を爲すことが出来ますが吾邦では慣習上から言つても夫婦獨立して養子縁組を爲すことは許しません。それでありますから、縁組に付きましては、夫婦兩人の同意がなくては駄目なのであります。

### 第三、同意

養子縁組を爲さんとする者は、その家にある父母の同意を得、縁組又は婚姻によりて他家に入つた者が、更に養子として他家に入らうとするには實家に在る父兄の同意を得、家族か養子縁組を爲さんとするときは、戸主の同意を必要とします。茲に一寸注意せねはならぬことは、前にも述べた如く、婚姻の場合に於きましては、男子は満三十一年女子は二十五年に達したときは、家に在る父兄の同意を要しませんが、養子縁組に付さましても

その年齢に制限もなければ又父母の同意も要せないことであります。

### 第二項 形式上の要件

縁組の方式に付きましては、婚姻のときと同じく之を戸籍吏に届出づるに因つてその效力を生じます。又その届出の方法及び證人等も婚姻に關すると同一でありますから、亦茲に復説しません。養子縁組に付きましては、縁組の無効及び取消されるとか、離縁とか謂ふことがありますが、これ等は大体婚姻のときとよく似てゐますから詳しく述べないで、家庭教育上最も必要である、親權に移つて少しく説かうと思ひます。

#### ▲ローゼヴェルト家の食卓

米國大統領ローゼヴェルト氏は朝飯に雞卵一個と小さいパンとコーヒーとを用うるだけで、書鑑もまた頗る質素なもの、彼が一日の盛餐たる晩餐に於ても、三鉢の料理が出るのが普通で時としては二鉢の事もある、彼及び彼の家族は此の質素な生活に満足して、ホワイトハウスに樂しい家庭を作つて居る



## 短歌募集

○課題隨意

○〆切十月十日

○短歌  
菅原喜代子

朝な夕な土かひおきし撫子の咲くなも待たで去まし君はも  
行けどくみどりにつゝく夏山や空には浮ぶ雲もなくして

つくぐと思ひ入りなば三ヶ月の影もかなしき虫の聲かな  
若き眉に夕べ露うく花野路や冷たき風よ吹くは二人に

○三井白梅

水樓やはらすくれなる様に充ちて朝風露に勾ひこめたら  
墨すりて人待つ宵を夕顔の花にかくるゝ夕づゝのかげ

○玉尾昌吉

下京の女艶なる絹團扇うすき情とかれおどろきぬ  
夏穢や狂ふ小波にもつれあふ藻の花二つ見えつ隠れつ

○吉野絹子

朝露にめれて立たせる姫み子の秋うつくし桔梗紫  
神ありてさゝやく如き響き哉朝露ちらふ白はらす花

○清水分

送り來し優しき文字にうさひめる撫子の花永久にあせされ  
紅牡丹蝶を添えたる扇かさし車して行く庵叟哉

○秋蘭館

夏草のしげみ眞白き花見出で打つ手音なきうなる子の群

○山脇山子



○投稿選評

用紙はがきニテ本會宛

人育兒日誌特製一冊定價五十錢

西山志次編

天日本家庭辭書冊一定價壹圓參拾錢

下田歌子著

地女子の修養冊一定價七拾錢

東基吉著

本會

○田中三舟

○無聊吟社句集

朝雨や青葉にのこる月淡くゆれて涼しき風鈴の聲  
やつれませし君が面輪と白百合を小雨の園にそみて見る

鹽野奇零

存

田邊

君も苦も露を命の花の上は知らずと云ひて洩らす笑み哉  
山の上に隠者も出で、涼むらむこの宵の月この宵の風

此處よりは身延へ三里夏野かな  
鶴鳴れて金鼓の響き閑の聲

六ヶ村祝捷かねて辻角力  
今朝の秋友の病ひを傳へけり

葛の花壇傾いて入住ます

身を飾る美くし花と若き子が胸の扉に歎影らば足る  
はちす吹く風にそと搖る瓊珞の一つ／＼に光り露ちる

琴の音は離れの間なり繪燈籠  
重藤の弓満引いて秦山子かな

蔓珠砂華怪談ありし屋敷跡  
山深く迷ふ徑や木の子狩

夕潮のせめよす汀さまよひて  
得しうたならむ白き藻の花

神路山晝を灯ともす岩の戸に  
太古生ひぬる苦の香深き

傾きし小挽の小屋や葉鷄頭  
番僧の雨戸明けるや萩の花

朝寒を語り合ひけり壁隣り  
失戀の心美くし蓮の花

川狩や昨日故山の人となり  
氷賣る旗も古びて秋の風

裏山に子猿の啼きて秋の夕  
残る蚊や雨に淋しき草の宿

質店に物貰ふて入る秋の暮  
唄も出ぬ馬士の姿や秋の雨

行水に五色の雲や西の山  
碑を探る謹の岡や蔓珠砂華

舟水零

もど子と人婦



## 短篇小說

秋

堀内新泉

昨日に變る、わが身の上、この世のこととは、何に一つとして、當になる事は無い、と、折々しは、成程、夫は天死なされたなれど、今茲十一の忠齋といふ、愛らしい男の兒を頭にして、末に、二人の娘もある。

假令何程の、財産を遺して逝つて下さつた所でこんな愛らしい、わすれ形見を置いて逝つて下さらなかつたならば、彼程、私を愛して居て下さつた、ア、片時も忘れられぬ、戀しい良人の係を何うして忍ぶことが出来ましやう。清水家の、まだ、若い未亡人は、今日の、切ない境涯の中にも、何時も、斯う思ひかへて、みづから慰めるのであつた。けれども、清水工學士は、事業中途にして、圖

らず無常の風に誘はれたので、跡に、まだ、若干の財産をも遣し得ず、わが温順なる妻に對する遺産としては、たゞ、三人の幼兒を遣して行つたばかりであつた。

前にも云つたやうに、未亡人は、精神的に何等の愛も情もない金よりは、夫の生きた寫眞とも見るべき、此方の可愛い、しかも幾何と價値の附し難い、遺産の方を嘉ぶのではあるが、今日の生上の骨の折方は、櫻に嵐と云はうか、牡丹の若芽に石と云はうか、實に、酷い状態である。亡夫の兄弟は、三人あつて、皆、可なりの生活を營つて居る。それが、幾何づゝか補助するかとも云へば、場合に依つてはせぬでもないが、三人ともに、一度も、快くしてくれたことはない。古家の破れかゝる時は、何處も一度に痛んで来るやうに、人の運命に、血が通はなく成つて来る時は、何方に向いて見ても、冷い風が吹いて居る。惑然に、未亡人は、近頃いよ／＼財政に迫る所から、此家も、今は、兄夫婦の代に成つて居る、わが生家に歸つて、身の振方に就き、僅に、

口を切りかけると、向ふは、はや、點頭いて、兄なる人の曰くが酷い。

何うせ、お前が、晚かれ、早かれ、そんな事を云つて来るだらうと思つたが、知つての通り、ふれが、今日の境涯は、他人の女房子を食はせる所の話でない、わが妻子でさへ重荷で敵はぬ。この節一文の金もなしに、女子の細腕一本で、三人の児を育て、行かうなどは、實に、飛んだ、了簡違ひだ。なア！世は出来るやうに遣つて行かないければ仕方がない。これは、お前に、今夜、始めて云つて聞かせる事では無いぞ！清水が死んだ當座に、スグ最う先を見越して、おれが、ちやアんと云つたことだが、今日、無財産の身で、三人の児を育て、行かうと云ふには、腕に力瘤のある男では樂な仕事でない、况んや、女子の細腕で、何うして、やつて、行けるものかい、考へて見るが宜い！そんな無鐵砲な、空拳で、割れもせぬ岩を叩くやうなことをするよりか、關アこれア無い、清水に兄弟が、三人あるのを幸ひにさ、一人づゝ、児を放りつけて、明日にも早くと歸つて來い！ふ

口を切りかけると、向ふは、はや、點頭いて、兄なる人の曰くが酷い。

何うせ、お前が、晚かれ、早かれ、そんな事を云つて来るだらうと思つたが、知つての通り、ふれが、今日の境涯は、他人の女房子を食はせる所の話でない、わが妻子でさへ重荷で敵はぬ。この節一文の金もなしに、女子の細腕一本で、三人の児を育て、行かうなどは、實に、飛んだ、了簡違ひだ。なア！世は出来るやうに遣つて行かないければ仕方がない。これは、お前に、今夜、始めて云つて聞かせる事では無いぞ！清水が死んだ當座に、スグ最う先を見越して、おれが、ちやアんと云つたことだが、今日、無財産の身で、三人の児を育て、行かうと云ふには、腕に力瘤のある男では樂な仕事でない、况んや、女子の細腕で、何うして、やつて、行けるものかい、考へて見るが宜い！そんな無鐵砲な、空拳で、割れもせぬ岩を

前一人の軽い身になれば、まあだ、年齢は若いし、ふれが、何んなにでも骨折つて、身の振方を附け、てやる！ねエ、お牧、左様ぢやないか。

嫂も膝を前め、

嫂

『お濱さん、ほんとに、それが一番ですよ』

忍ぶ力に強い婦人は、泣きもせず、憇りもせず、心の底に、兄夫婦の無情を泣いて、顔も言語も騒がせず。

『何うも、いろ／＼有難う存じます！いづれ篇と考へまして、また、御相談に参ります』

月下に思案の女足、頓に夫を亡つた、お濱は、とほ／＼歩いて居たが、ア、家には小供三人きり、と、ふもひ浮ぶや、今更らしく、足を早めて歸つて見ると、三人ながら待飽いて、二人は、月の疊に眠り、今茲十一の忠麿は、小さい欠伸をして居つた。

「忠さん歸りましたよ」

「聲、聞きつけて、振り返り、

「ア、母さん！」

『淋しかつたでせうね。何方もお見えなさらなかつたの?』

『誰も來なかつたの』

『オヤ、秋さんも、玉さんも、こんな所にお寝させて』

『今、二人とも、寝ちゃつたの』

『スグ、歸らうと思つたけれどね』

『母さん、モウ、僕も眠い!』

『はあ、今、お床を延べてあげますよ』

『母さんが居ない、母さんが居ないって、玉ちゃんが泣いて困つたの』

『母は、床を延べながら、

『さうでしたらうね、切めて、玉ちゃん丈なりと伴れて行きたかつたんですが、子供の大勢居るのは嫌だと云つて、叔父さんがおきらいなさるものですからね。』

『母さん、叔父さんは、何故、僕達を、彼んなに嫌がるの!』

『何故だと云ふこともありませんがね』

『だつて、叔父さんの家にも、幸ちゃんやら、竹

ちゃんやら、梅ちゃんやら、彼んなに、どつさり小供が居らア!』

『おツ母さんは、返事に困つた。』

『さあ、忠さんや、お休み!』

『母さんは?』

『母さんも、今、スグにね!』

『母さん、お先に!』

『はあ、お休み!』

『今、床に、入つたかと思へば、モウ、すやすと眠た様子。』

『まあ、何んといふ、好いお月夜だらう』

『お濱か、淋しい顔をして、凝然と仰いで居る月

は、満圓く満ちて居るが、我か身には、こゝ二月

ばかり前より、大事なものが一つ欠けた。

又しても、おもひ出したか、ホロリ／＼と落涙

しながら、戸締をして、燈火を細め、凝然と立つ

た、寝巻姿のやつれ方! 寝冷させじと二人によく被せ、一人は抱いて、一度は床に入つたが、片舷ついて身を起し、可愛寐顔を一づづ、見ては、

また、おもひ換へ、  
『たが、まあ、斯うして、二人も小供があるから！』  
と樂しい未來を、腦に描いて、母は、淋しく、微笑した。

三、  
未亡人の兩眼は、今朝、重さうに膨れて居る。

それも、その箸、昨夜は、一目も寝なかつた。  
今朝も、思案に沈み勝、やツとの思ひで、御飯を炊き、お膳を拵へるのを待つて、三人は、何時もの席に座つたが、二人は、まだ、不器用な握り箸、可愛口して、食べるのを、此方で、凝然と見て居たが、『ア、不憫に何にも知らぬ！』とふもへば、涙グツと、胸を衝き、ふもはず、ワアと泣き出して、両手に、顔を隠す間も無く、指の間から、スターと、水晶の球のやうな、涙が、膝に落つるのであつた。

『母さん、何故、泣くの？何ふしたの？』  
小供心に、心から案じ、駆寄つて、首に纏り、モウ泣きさうにして、肩から顔を覗き込めば、末

『ア、泣きはしない！泣きはしない！まあ、モウ、皆な、御飯をお食べ！斯うして、お前達が居てくれるのに、母さんが泣くものか、』  
ア、最う、季節は、確に、秋！この、まあ、朝風の身に沁むこと。

先頃の新聞に採食料として書いてあつた中次の二つは面白いから

馬鈴薯のコロッケ

馬鈴薯を茹で、つぶし、鹽と胡椒とを入れて程よく丸め、パン粉を付けて、またかきまはして卵を付け、更にパン粉を付けて、胡麻油にてあげる

殘飯の葉子

餘り飯に應じて、薺麥がきを固くこしらへ、その中へ、冷飯を入れて能くかきまはして握り、鐵網のうへにて醤油の附け焼きとす、餘り飯とは思はれず。

## 朝の西洋料理 實習筆記

石井泰次郎

のせて出す。  
食方は、洋刀にて卵の上の方を、打ちて切り取  
り、中のきみを、匙にて、すくひて食す。

○以上は朝のこんだて中より實習したのを傍  
で見たまゝの筆記なり、次のは別の一品料理  
なり

○ウラウン、トースト(きつね色のやきパン)  
麺麪は、半斤を六つ位三分厚さに切り、兩面とも  
きつね色にやき、くろくこげたる所は、ないふに  
て、けづり去り、片面だけに、バタをぬり、めぐ  
りの堅き所を切り去り、堅に二つに切り、組み重  
さぬるやうに皿に盛る。

○スクランブル、エッグス  
鶏卵二箇、鉢に割り入れ鹽、胡椒、小匙半杯づゝ  
加へ、牛乳三勺を合せ、よくかきまわし。

○スクランブル、エッグス  
鍋に、バタ小匙二杯を入れ火にかけ、バタのとけ  
し所へ前の玉子を入れ、木杓子にてかきまわし、  
玉子の煮えて、あまり固くななく、柔かくなき、か  
げんの時、火よりふろし、皿へ盛りて出すなり。  
又、薄く切りたる、焼パンの上へ、覆ひかけても  
出するなり。

○オートミル、シユガ  
ヤートミル、七勺位を鍋に入れ、水一合五勺はか  
り入れ、火にかけ、時々かきまわしつゝ、柔かく  
なる迄、煮るなり、時間は二十分位、中途にて、  
水少なくなりし時は、湯をたし入るゝなり。  
柔かになりし時、牛乳一合、砂糖五匁(甘くない  
だけ)を加へ、少し煮てふろし、皿に盛り、砂糖  
をかけ、匙を添へて出す。

○ソフトボイル、エッグス  
鶏卵を、熱湯の中へ投じ、三分間たちて取出し、  
水に入れ、直にして、器に鹽を盛りそれの上へ

英國皇太子は鳩を愛して夥しく多くの鳩を飼養せらる  
が太子は此他に古郵便切手を集むることを好み又小  
兒の寫眞を集むることを好み滑稽なる顔にて撮影したる  
ものは殊に其好む所にして新聞雑誌の廣告に見ゆる寫  
眞の如きは悉く之を切抜き集め居らるゝ由なり

## すん子

朝露生

この名簿をうつしとて、遠き旅路にのはらんと  
せるとき、妙な名をつけたものかなとひとりだと  
したのみで、御身のことについてはその外少しも  
考へなかつた。しかし御身今は世になき人の數に  
入りしこといて、二千余名の名簿のうち、御身の  
名が一番眼につくやうになつた。ア、假りにも御  
身の師となりて、かくも愛念のうすかりしことの  
恥かしさよ。苦の下なるすん子よ。ゆるしてふく  
れ。四千里の海をへだて、居るが、植え置きし佛  
苗のふとづれ、船つくごとにきかぬ折もなく、心  
はつねに教壇のほとりにさまよふて居る。今夢  
を昔がたりにして、つとへる皆々に語らんと思ふ  
て居るものを、一人、そのき、手を失ふたこと、  
悔やしい。漁村の貧家に成長ちたる御身のことな  
れば、學齢の前より子守となり、わがもとにてイ  
ロハを習ひはじめたやうなもの、金釘流でもよい  
から手紙書けよと命じたにも拘らず、いつか來り

し一束のうちには御身の手紙はなかつた。習字で  
もよいのに、なぜ送ってくれなかつたか、恨みだ  
よまさか。この世で再び先生に遇はれぬとは御身  
も知らなかつたであらふ。  
算術は極々きらひであつた。坪内さんの國語讀  
本、たしか六まですらすら讀めてあつたのに、加  
法と減法と漸くわかつた位で別れた。何日だつ  
たか、御身は先生に恨みを言ふたことがあつた。  
朝から晩まで子供を背負ふて苦しいのに、先生か  
ら算術でせめられる、これでは命がつゝきませぬ  
と云ふた。その時は大笑ひをしたが思へばま  
とにふびんだつた。  
せなかの子は、中々眠らない子で、面白い御話を  
きく時には、意地わるくも泣きだし、困つたこと  
もあつた。いつやらのふ節句に、今日は一日子と  
もを下してもよいとて喜びいさんであつたが、二  
時間ばかり遊ぶうちに、どうしてゐたか氣にかゝ  
つてたまらぬとて、家にかへり、またふんぶして  
きたことがある。あの子も今は大きくなつたらふ  
が、折々肝癪を起して、むしツてやつた黒髪の主

は、浦邊の御寺の墓に葬られて、松風の子守歌を  
きいて居るとは、知るや知らずや、子守學校の同  
窓は、この一年のうちに色々の變化の浪に襲はれ  
たやうだ。軽くなりし背中に、下婢のつとめと云  
ふ無形の重荷を負ふて居るものある。嫁さんと  
なりて、椿の花の葉がくれに、形ばかりの家庭をし  
つらひて居るものある。ふる里離れて他郷のか  
り人となりし子もある。早ちはわが子を抱くべき  
年でろになりても、まだ子守をして居るものあ  
る。されど死んだ御身こそは、誰れよりもかれよ  
りも一番貧乏だった。いそがしき御身の父母は、  
富める人の悲しむほど、悶え煩ふひまもなかつた  
らふ。老ひたる祖父母さへ、涙片手に、働きに出  
たであらふ。富める人の葬式には、郷黨こそぞて  
野邊送りするのに、御身の時にはさぞな淋しかつ  
たであらふ、墨染すがたの、御身の先生さへ、親  
しく御身の塚に花をたむけること出来ず、浮世は  
まことにこんなものか。吾とても片田舎の名なし  
草、いさゝ川に根を洗はれて、いづの間にか世の  
海に出て見れば、吾身の小なることが今更のやう

にはかなまれ、御身達が思ふやうな雄々しき心も  
うるはしき心も、いつの間にか波にもまれて失せ  
たやうなもの、大空に飛ぶ塵の一つよりも、たの  
もしからぬ身の上である。  
學びの道は云ふまでもなく、世渡りの術さへいつ  
も人後に落ちて、言葉も風俗も全く異なるこの國に  
見すべらしくその日その日を送つて居る。されど  
大慈悲の余光胸の底に宿りて、朝な／＼暖かき慰  
籍を得、夕な／＼新らしき激励に奮起して居る。  
はかなしと思ひし浮世は、實に劫外の春なのであ  
つて、頼母しげなきこの塵の一つさへ、決して空  
しく飛んで居らぬ。名なし草の云ひかなきも、  
無邊際の御親の堂に育てらるゝことを思ふては、  
何の恥らふことかある前も後も無碍光にうゝまれ  
て居るのだ。これはしたり、とんだひづかしいこ  
とを云ふたものかな。生きて居る御身なら、早速  
あべこべに御小言をあびせかけることであらふに  
どうしても御身は死んだやうでない。イヤたしか  
今は世になきいとしの教へ子よ。ゆるせいつもの  
先生の口癖を。

身は活きて居る。つゝれの中に生れつゝれの御中に息絶へしは、御身の肉身である。よしや綾羅の袂を翻へして、翠帳紅闇にやすらへばとて、この肉身のいつまでか、富み榮え、いつまでか變らぬ觀樂に醉ふとを得べき。死なねば人のまごゝろのみなるそ。ある時はワシントンのむろに宿りて十三州の友のために泣き、身をさゝげても友の自由を得せしめんとの貴き志を起さしめた。ロングエローに詩を書かせ、アービングに痛告せしめたのも、まだゝろの大神の奇績に外ならぬ。東西古の歴史を繙くごとに奇しき大威力の、錦を織り花を飾つて居るのに驚歎せぬことはない。事績の大と小と、人の知ると知らざるとは、論らふかぎりかは。偉人の而影にやどりし光明も、わがすん子の亂れ髪に寓せられし光明も、見来れば全く不二だちやないか。

隣縣の人には少しも解せられぬ方言をまじへ、浦人のつねなる高調子にて、かたる御身の聲音は再びきかれぬであらぶ。されど渡津海のさけびにも伶人の音樂にも、あはれとことはの響ないことが

あらふか。あるときはバイブルをさゝぐるミニスクーの口より、あるときは珠數を爪ぐる高僧の口より、御身の殘れる音聲をきくこともあるであらふ、神の福音と名づくるもよし、佛智の不思議と讀するも可、人さまざまの名をつくりて、人さまざまの分限に従つて感得されど、カント、ヘーゲルも辛ふじて獲得せる實を、掛け算も知らぬ子守にまで、惜しげもなく與へ玉ふは、ありがたき思召だではないか。神か佛か。吾知らず。吾は唯この大慈悲の光明普きことに感泣するものである。

思ひ起せば、うれしきことの数々、そのまゝ悲しきこと、なるやうであるが、頼みがひなき吾身を師とたのみて、この幾年の間、親の如く兄の如くかしつける教へ子たちの心、どうして忘れやうとして忘れられやうか。傳道のかへりみち、ふりつもる雪に路もあらなくに、浪うつ松林に、唱歌勇ましくうたひて、吾を迎へてくれたのは、御身等の一群である。吾妻河原に石を拾

やこの國にながくとまりて、金髪の教へ子、碧眼の友と修養を共にすることありとも、わが心には御身等のまごゝろ常にやどり居るものを、吾はた何をか恨みとせん。くれどもれども盡きぬくりとを、書きて悲しみていつまでたつとも要なきこと、さらば、すん子よ。異國の花は窓のもとにうちあめど、秋にも似たるわが心、御佛の外誰にか語るべき、（八月十一日）

## 名士の家庭

太田龍東

### 戸水法學博士の家庭

ひて、夕日の浪間に沈みゆくを忘るゝ時も、わが聲をきくては、集めし石をうちて、背にせる稚子まで笑顔つくりてかけよるは御身等の常であつた。一年一度の盆躍り、明日からこの浴衣きてと新らしきとはこる時も、やめよ躍るなよとのわが一と言にて、かとなしく服從して、思ひきりたるは御身等のエライところである。浪のしはぶきに裳ぬる巖の上にまどねして、わが拙き話をさくとこも、蕨とる野邊に蹲りてわが命ずるまゝ暗誦を雲雀の如く囁る時も、曇りなき心月は形骸の外に輝きて、吾はひそかに御身等の從順の徳を敬ひたること幾度であつたらん。教へしもの、學藝は言ふに足らず、習ひしものとて、ものゝ用には立ち得なかつたらふが、かの數年間に、吾等の間に咲きほこりたる友愛の花、御佛のさげものとして露恥かしきことはないと信ずる。

のこれる教へ子と御身の先生に、これよりのちいつまで學びついくること出来るだらふか。いつまたかの松林に迎へらるゝことであらふか。御身の運命と同じくわが運命も前途は暗黒である。よし

予常に人に語るに、日露戰争に依りて天下に名を擧げたるもの三名あるを以てす。即ち一は東郷大將、二は小村男爵として他の一は戸水博士是れなり。前二者は戰争に大關係ある軍人及び外務大臣なれば、戰爭の結果名を博するは致て不思議なけれど、學者たる博士が之れが爲め全國至る所知らざる者なきに至りしは、蓋し英傑にあらずして何ぞ。而してこの一代の名士を出したる家庭が抑も如何なるものなるかを知るは、家庭の實際に當られる諸婦人には最も有益なることと信するを以て、左に少しく之を説かんと欲す。

## 博士の略歴

博士名を寛人と云ひ、文久元年を以て加賀の金澤に生る。家世々儒學を以て傳はり、嚴父信義氏は、加賀侯の國老（今の本多男爵）に儒を以て事へたり。博士は八人の兄弟中なる長男にして幼より父に漢學を學び、規律正しき族を受くること十二年、それより學校の寄宿舎に入られき。而して、法科大學を卒業されしは年方二十五の時にして、間もなく留學を命ぜられ海外に在ること六年に亘りぬ。その修めし學科は、或は法律、或は政治、或は哲學或は語學、と云へる如く、學科數の多きこと實に驚くばかりにして。博士が今日博學の稱あるは所以あることなり。

博士は帝國大學に奉職さるゝ外、日本大學の理事として多大の力をそき給へり。日本大學長は松岡廉毅氏なるも、殆んど有名無實に近く、事實上の學長は全く博士に存す。日本大學が今日法律學校として朝日の如き盛況を呈し、且つ好評を博するに至りしは博士の力によると云ふも過言にあらざるなり。博士は斯の如く一學者として、又經營家として大手腕あるのみならず、又英傑として立派な性格を有せらるゝ人なり。

## 住宅

幾多の英魂を祭れる九段の中坂を、眞直に飯田河岸に突き當り左に行くこと三四軒にして、薄墨き長屋門に『戸水』とへる標札のあるを見る。是れ即ち博士の住宅なり。家は日本風にして、大ならずと雖も閑雅に、麗ならずと雖も清爽に、一見豪家の贋宅然たり客間は八疊にして、二三の古き額面は、この室の雅趣を添ふ。博士は有名なる讀書家なれば、和漢洋の珍書を集むること多く、丸善に

博士名を寛人と云ひ、文久元年を以て加賀の金澤に生る。家世々儒學を以て傳はり、嚴父信義氏は、加賀侯の國老（今の本多男爵）に儒を以て事へたり。博士は八人の兄弟中なる長男にして幼より父に漢學を學び、規律正しき族を受くること十二年、それより學校の寄宿舎に入られき。而して、法科大學を卒業されしは年方二十五の時にして、間もなく留學を命ぜられ海外に在ること六年に亘りぬ。その修めし學科は、或は法律、或は政治、或は哲學或は語學、と云へる如く、學科數の多きこと實に驚くばかりにして。博士が今日博學の稱あるは所以あることなり。

博士の家庭

まづ夫人のことより述べんに、夫人は脇子とて博士より十歳若く即ち今年三十五歳にして、加賀國大聖寺の生れなりき。普通學は元の東京高等女學校に修められ、今の石本陸軍中將の夫人と同窓友なりと云ふ。博士は家事上のことは關係せらざるを以て夫人一人にて之れを司り、炊事掃除を下女に爲さしむる外、他は悉く自らさるるなん。常に儉素にして奢侈ならず、家計その度を得て一家を調和するに妙を得られしものゝ如し。凡そ婦人は學識の高からんよりは、夫をよく扶け子女を教育し、以て圓滿なる家庭を作らんことこそ望ましけれ。之れ所謂良妻賢母なるものにして今のが女學生上りが少しの學問を鼻にかけ、女權を振り廻はすか如きは一家の主婦として完全ならざるのみならず、一般婦女としての美德を失へるものと云ふべし。而して予は茲に博士の夫人を以て婦人の模範なりとは謂はざるも、少なくとも一家の主婦として非難すべき餘地なきを疑はざるなり。夫人は他の婦人の如く何々會長或は何々幹事と云へるが如く、形式上の名利を貪ばることを好まず、事実實質を重んぜらるゝものに似たり。

博士に一子あり、その名を元（十五歳）と云ひて、今年東京府第一中學校を卒業し、第一高等學校英法科へ入學されき。博士は元氏

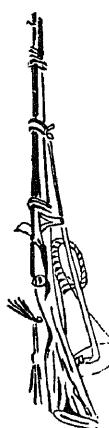
の法學を志望せらるゝに就き左の如く述べられたり。「元來人の學問するや、その人によりて學科を鑑定せざる可らず。我子の能力如何をも顧みず、親の權力を以て何々を研究せよと云ふが如きは恰も茄子に南瓜を實らせんとするが如く、到底得て望む可らず、故に予は余の子息の目的に就きては本人の自由に任せ少しの干涉をなさず、然れども強いて希望を謂へば、政治學を研究させたきものなり云々」と。如何にも博士の性質よりせば、法律家よりも政治家を希望せる、ば當然なり博士がその希望を強制せずして本人の自由に任せせるは最も當を得たるものと云ふべし。元來博士は剛情にして、一旦自己の思ひ立ちしことは是非遂行されば止まざることは、吾人の塵々耳にせる所にして、之れを日本大學の執務の凡て頗る、專制的なるに徴するも其一端を知るに足らん。然るに博士がその子を教育するに當りて、かく寛大なる自由を與へらるゝに至りしは、蓋し博士自身が經驗より生ぜしものにあらざる。

この元氏は博士に似て餘程の讀書好きなるよし、こは博士が終日讀書さるゝ感化を受しならんも、幾分か遺傳の然らしむる所たらすんばあらす。戸水家は世々子なきを以て養子せるが例なるも博士に至りて初めてこの例を破り、實子として父の相續を爲す、に至り、又元氏之れを續くべくなりと云ふ。博士の教養法は放任的にして細事には少しも子疎せず、その大體に於て注意せらるゝが如く、夫人亦同方針なるに似たり。殊に博士は自然の愛を尊重し、常に子に對しては勿論、夫人召使又は他人に對してもこれを主とせり。故に家庭間お互に於て自然の愛は充満され、その團

樂の樂しき家庭は實に人目にもうらやむばかりなり。世には外部にこそ平和に見ゆれ、その内面に入れば風波の絶ゆる事なく悲痛を極むる家庭なきにあらずと雖も、博士の家庭はこの點に於て確かに模範とするものなり。

而して茲に注意すべきは、學校生活のみにて家庭生活を知らざる博士と嚴格なる家庭に養育されし夫人との二人が、家庭を作つて子を養育することこれなり。この二分子によりて養育されし元氏は、果して如何なる性格の人となる可きか。予は活潑してその成績を見んと欲す。

博士の母堂は昨年黄泉の客となられしが、嚴父信義氏は今年六十八歳にして博士と居を異にするを以て歿、訪問慰安し、孝養至らざるなしと、博士の兄弟中六人婦人は、皆それ／＼良縁に就かれしが、博士の次なるは夫死亡せるを以て今は専ら嚴父の孝養に日々送り、他の兄弟中の二妹亦過ぎし間に何れ少佐たる良人を失ひ給へりと云ふ。



## 學校と幼稚園

### 恩物管見

余は先頃思ふ所わつて、ふと某小學校併置の幼稚園を參觀した。見るからに愛くるしき幼兒は三々五々手を連ねて園内の彼方此方に遊び戯れて居つた。或は築山に上つたり下りたりして居るものもあれば、或は砂場に木製の鋤いつ採りて穴を堀り堤を築きさては墜道さては橋渠と思ひ／＼に造りなして、彼方に「ピゴト」と汽車が走れば此方には「チン／＼、動キマス」と電車が行くなど實に、たわいもなく罪もなく、座るに見るものをして一種清高の感あらしむるが如き景色であつたので頗る感じ入つた。明治の聖代に生れ此幸多しき限られと思つた。

頓がて鐘はなつた。保母にもやあらん中年の婦人が微笑やかに出て來た。そして幼兒を列べて室に

一  
閑人

入りらうとするが、如何な事、幼兒等は中々に列入はない、電車の遊び未だ／＼興の盡爲めと見える。先生は頻りにあちらを呼び此方を招きして漸くに列を整へて室に入つた。予も續いて後から入つた。そして何が始まるのかと見て居ると先生は小さな箱に入つた色板を持出して幾つ宛かを各幼兒に配つた。そして自ら黒板に色付のチョークで汽車を描いた。そして幼兒等に之を見て此通りに列べて見よと命令すると幼兒等は板を探つて列べ始めた。忽ちの中に列べ上のもあれば、何時迄經つても列べられないものもある。列べ終つたものは所在なさに欠伸して遊んで居り、列べ終らぬものはわからないのでしょげて居る。其中に先生は向はつて来て、出来た者には隨意に何かを列べることを命じ、出来ぬものには教へて遣つて居た。それも済むと頓て道具は箱にしまわれて、幼兒は室外へと出て行つた。そして一時はゴトリとの音もしなかつた園内が今再び賑くなる幼兒のさわぐ聲にひつくり返りそうになつた。そこで予はつく／＼と思つた。フレーベル

は幼兒教育の開祖である。そして其工夫に依つて出来た所謂二十恩物は、幼兒教育の最良手段として今日盛んに各幼稚園に用ひられて居るが、是果して最良のものであらうか、予が參觀せる此日の如き好晴なる温日に而も幼兒が嬉々として花に遊び虫を逐ひ或は砂場に或は小山に我を忘れて遊び暮して居る其興味を割いて狭まくるしき室内に押しここで、申込みて二三つ宛の欠伸を製造せしめながらも持たせなければならぬ程に有要久く可らざるものであらうか、是は大に考へものではあるまいか、聞けばアーベルも元は雨天の時の消閑の具として用ゐたのが始まりで漸々と工夫しましたのだと云ふことだ。従つて其價值も絶体無限と云ふ譯にゆかぬ勘定だが、何うも今の幼稚園では比較的的是に重きを置き過ぎる様に思ふが是も素人の岡眼しかしら。

第二に予が不審に思ふのは所謂二十恩物が其中の一を除く外は悉く幾何形體の上に組織されて居ることである。幼兒に課する手技が幾何形體の順序を離れてならぬものならいざ知らず、然もな

いものであるならば必ずしも二十恩物の順序は踏まなければならないものであるまい。

第三には其種類も敢えて此二十種に限ることはあらまいと思ふ。聞けば恩物の種類は必ずしも二十に限らぬ學者によると三十六種とする人もあるそをだ。要是兒童に對する教育的價値如何にあるので。若し充分の價値あるものであるなら是以外適當のものを加へるに不都合はない筈だ。丁度二十恩物中の紙刺が幼兒に不適當として省く人の多いと同じ道理である。

第四には現今の保育學や教育學では兒童の個性と云ふものを大變に重んじて居る。殊に幼兒には其取り扱ひ上にさへ個性を懸念して個別的に取り扱ふ可きものとしてあるに係らず、其恩物遊び方を課する有り様は頗る平等的で一般的で甲も乙も丙も何時も同じ様な事をさせられて居る、と云ふのは是は果して恩物の眞意であらうか疑はしいものである。要するに遊び方の種類と順序とはどの幼兒にも適する様には豫め一定することの出来るものではないと思ふ。

第五には恩物を玩ぶ所の所謂手技なる遊戯は幼兒

の行ひ居る全遊戯中の一部分に過ぎぬから其價值

も亦幼兒保育の全部に對しては部分的だと思ふの

である。然るに從來の幼稚園では何うも是を重く見過ぎて居る様に見える。従つて幼兒教育の過半

は此手技に依つて行はるゝものと思つて居る人も

ある様であるが、あんまり買ひ被つて居りはしないかと思ふ。

素人の岡道の人が見たら馬鹿らしくもあらうが兎に角當局の一顧を煩はしたいものだ。讀者諸君若し我輩の所感に就いて御意見があらば何卒本誌上に於て示教せられることを敢えて希望す。

▲星と交通　日下英國ランカシャー州にて紡績所より製する糸の長さは一日に一億五千五百哩なるが、此の速力にて月に達する糸を作るには僅かに二千分餘にて充分なり、又六日間の製糸にて地球を一周する事を得べく、十八日間の糸の長さにて太陽より海王星に達する糸を紡ぐには大抵五百年間を要すべしといふ

## 雑録

●お伽噺の會　毎月一回づゝ、數多の少年少女と少女の開會の辭に次で東洋幼稚園長岸邊福雄氏は、「大浴幹少尉」と題し趣味深き談話となし、數百の願を解及び狂言「千鳥」あり最後に巖谷小波氏は、「魔王」と云ふ題下に例によりて老熟の辯を揮ひ堂に溢る、許なる小國民を酔はしめたるが、此お伽噺は來月川上貞奴に演ぜらる可き。お芝居の筋書きとなりと云ふ。斯くて話の間々には三光堂の蓄音器ありて興を助け歎聲洋々の中に散會せるは午後四時半なり。

●少年の天幕生活　皆て國民新聞の蘇峰子頻りに邦人に勧むるに夏の天幕生活を以てせることありき。當時世人は之に一顧の注意をも拂はざりしが記者は之れ頗る遺憾の事なりと思ひぬ。爾來數年

現せられんとは實に思ひ掛けぬ事なりかし。  
の今日端なく之を富祐なる家の子弟によりて實  
現せられんとは實に思ひ掛けぬ事なりかし。  
小石川安藤坂上なる三井三郎助氏の令息高修(十五)  
高達(二十)と云ふ二少年は今年の夏季休暇中を利用  
して雲深く氣清き碓氷の山中に約三週間の天幕生  
活を營み首尾よく効を奏して先頃歸京したりと云  
ふ。今企畫と實況とに就きて聞きたる儘を記さんに  
兄の高修氏は現に麹町區段曉星中學の生徒、弟高  
達氏は東京高等師範附屬中學の生徒にて同邸の書  
生松本新三郎氏(二十)と共に去月八日目的地なる信  
州輕井澤に着し間の在る處より溪流に沿うて上る  
こと十二丁ばかり碓氷峠と愛宕山との溪間に地を  
相し天幕の建設にと取りかゝりしが何に云ふに  
も荆棘道を鎌して開拓に骨の折れる深山の奥に驟  
雨は絶えず至りて雷鳴轟々と物凄まじく、大きな  
雲ふばかりなけれど三人互に囲まし合ひ遂に二間  
の山蛇さへ現はれ出で、人を惱ますに心細き事は  
建裡には二個の薦卓と四個の旅行携帶用ベット  
を備へ七輪、土鍋、小皿、茶碗、醤油、味噌、罐  
其外には方一間半の四阿を

詰、鹽等食用に關する一切の世帶道具と原料を整  
へ時に不足を告ぐる品あれば町まで出で、調達し  
高達氏が頻りに七輪に火を煽りて飯を炊けば兄の  
高修氏が副食の調理をなし懇くて三度の食事が  
出来ると云ふ極めて趣味多き生活を續け暇ある  
時は植物や昆蟲の採收に附近の山中を跋涉し夜は  
大抵八時に床に就き朝は四時起き出で、清澄  
なる溪川の水に身を淨むる神氣の爽かさは到底都  
在る人士の想ひ及ばざる程にて何れも頗る健全  
に勇氣満々として歸京し來年の夏休みには今年に  
優る大規模の天幕生活を營まんと意氣込み居れり  
とは富豪の子弟が壯圖洵に喜ぶべきなり。

● 東京保母養成所 同所にては来る十月月中旬第  
三回卒業式を舉行する由にて今回卒業者は略五  
十名なる由、從來本會へ直接保母の周旋方法御  
依頼の向にて未だ適當の人を得ざる方は該所卒業  
生の中より選抜せられては如何因に記す、同所第  
四回の開講は來年一月よりなりとぞ。

非常に注意を要する由にて普通の開業の醫師は我  
素人療治の椿事 小兒に盛る可き藥液の分量は

子への薬をふつつかなピツクリで調剤すると聞かつるに是は亦途法もなき生兵法とも云ふ可きか近日の新聞の報する所に依れば下谷上車阪町十番地笠井正人長女政枝(去る五月生)は兩三日前より風邪の氣味なりしに去十五日午後五時頃其の知友なる小石川久堅町八百五番地倉田方醫科大學生田村重次郎(二十一)が遊びに來りて政枝を診察しモルヒ不少量を與へ歸りしに政枝は懨て苦悶を始め翌午前三時頃遂に死亡したり斯くとも知らぬ重次郎は政枝の容体如何にと案じて翌日午後同家を訪ひしに思ひも寄らざる右の始末に重次郎は仰天して直ちに自宅へ立歸り其の申譯と我もモルヒ不服用して敢なく自殺を遂げたりとぞ其の無分別は云々迄もなけれど此れに付ても修業中の素人療治は慎むべきことなりかし。

●長崎幼兒保育所 同所は戰時軍人遺族の幼兒を収容せるものなりしよしなるが事件後も引續き經營せれる者にて軍人援護會は特に一千圓を交付して事業を助け居る由其保育の方法は毎朝六時より幼兒を收容するや質素清潔なる上衣(裏に各自の名

を記せし者)を着用せしめ長き廻廊と廣き外庭にて種々の遊戯となさしめ間々短時間つゝ室内にて講話唱歌積木紙工等を課し毎日一回入浴せしめ食物は晝食を與ふるの外午前十時午後四時各一回間食として粗菓を與へ毎月十五日は市内理髮所の休日なるにより其特志者來りて幼兒の理髪をなす而してかく多數の幼兒を一ヶ所に收容するにより各自の家庭にて生育せしむるに比し心身の發育或は低劣ならんことを恐れて深く注意を加へ尙幼稚園長高等女學校長市衛生課長等の指導を受けつゝありと云ふ吾人は此種の事業益盛ならんことを望む。

●幼兒の片親 世に悲惨なるもの歎なからず、然も幼兒にして片親を失へる程いちらしくも又憐れなるは歎し、殊に其母親を失へるものに至りては其悲慘の程度計り知る可からず。切に同情の涙に咽ばざるを得ず。之を吾人の経験に徵するに假令父親なくとも母親の堅固なるものあらば小兒の教育は割合によく行き届きて學校教育を受くる頃となりても別段に著るしき欠點として表されど之に

反して母親を失へる幼兒にありては其保育の面倒は多くは其舉止粗放なる父親にあるか若しくば慈愛なき他人の手に委せざるを得ず。從つて其結果は學校時代に表はれ來りて其心情は意外に拗れる事常とす。之を見ても幼兒と母親との關係の偉大なるを知る可き。本年の暑中休暇とか女子高等師範學校の保育實習科生徒某が九州に歸省せんと順路門司に渡れるに端なくも漁車中にて三人の男子が代るゝ母親を失へる生れし許りの幼兒を抱けるに出遇ひしが其苦辛せる様如何にも氣の毒にて見るに忍びず暫く赤子の守りをして遣りしに男心にも非常に感ぜしものと見え別れし後其名前を聞かんとて態々書を該校の生徒監に充て尋ね來りしと云ふ。

### ●精神疲勞調査法

兒童の精神疲勞の問題は教育上大切なるものなり殊に我幼兒教育上には實際應用す可き場合極めて多し。文部省は先年之が調査を報告せることありしが今回又新に之が調査を行ふ由今文部省が着手せんとする方法に關し當局者の談話なりと云ふを聞くに今回の調査は同省の駿

河醫師専ら之を擔任し各校醫の保助を得て來週中愈調査に取掛る豫定なるが其目的は専ら各學課の學生の腦及身體に於ける疲勞よりは休養の關係を調查するにありて差向き左の四法にあり二三直轉學校に試むべしと云ふ。

### (第一)クルケルスタイルン氏法

或學課を學ばんとする前計算法、記憶法、書取又は結合法、(之れは短文章を用ひして誤りを正す)等四種の中一

を撰びて或

る時間之れをなさしめ學課を終りた

る後更に其同一法を行ひ學課前後の成績を比較

して其學課の學生に及ぼす脳の疲勞を知ること

(第二)モッソ氏法

手及腕を固着し中指のみを自

由になし之に錐ある糸を附して自由に運動せし

め其運動を烟燻したる太鼓胴に刻み其指力筋の

疲勞を調査する法にて生徒の學課を學ばんとす

る前後に之を行ひ其太鼓面の波紋を比較して其

の疲勞を調査するなり。

### (第三)知覺測定法

是はグリフ、バツハ氏の法に

て皮膚の一點に「コン・バス」の如き尖端ある刺戟

物を觸れ其二點感と一點感との辨別する差違に

て疲労を知る法なり例へば或學課を學びたる前に之を試み比較すること前の如し。

(第四) 反應刺戟試驗法  
即ち甲の人、乙學生を驗せんとせば一二尺の間隔にて同形なる二物を置き甲第一に之れを打ち乙をして之に倣ひて手早く打たしむるにあり然るに脳に疲労を覺ゆる時は平時より其反應作用鋭敏に現れる。自然手早く打つ能ざるに至る此法も學課の前後に試みて其疲労を知るなりと云ふ。

●赤痢病猖獗秋期に入りて俄に冷氣を感じる時は傳染病など得て勢力を逞ふする例多きため各地方長官は傳染病警防法に基く夫々訓令を發布し豫防を督勵實施し居れるが昨今に至り各地方共意外に多數の新患者發し益々病毒蔓延の傾向を呈せり、昨日内務省衛生局の調査する處に依れば同患者發生地方別及本年年初以來の累計約三千人に昇る由父兄は此際一層注意して兒童の胃腸を損なざる様心掛くるを要す。

●躰操に就て白仁普通學務局長談に曰女子の躰操のを就て、白仁普通學務局長談に曰女子の躰操

も雑刀や鎧鎗でもやらせるがよいと云ふたてて新聞や雑誌に出居るそだ、あれは此間或人が來た折の談話の中があつたのであらう……思ふに凡て男子でも女子でも自衛防禦即ち敵を防ぐとを心得て置く必要がある、斯う云ふと其爲に警察もあらではなかと云ふであらう、併し夫は議論で實際上此必要がある、廣い世の中の馬鹿もわらう、狂人居やう、時には争闘も起るであらう斯様な咄嗟な間に事が起つた場合に、夫に處する准备がなからねば、鬪らざる危害を受ぬとも限らぬ、昨秋或地方の一女教師が暴漢に遭遇ひ、自分が携へて居つたナイフで四十箇所に傷を負はせられたと云ふとである、これは唯だ一例で、大小となく斯様な事實は幾つもあるではないか、夫れで男子も女子も夫れ相應に自衛防禦の術の心得が必要だと云ふのである……夫は一人の敵だ萬人の敵でないと頃羽から笑はれるかも知れないが畢竟之を小にしては損害を防ぐ爲め、大にしては戦争でもあつた場合に此心得があるとないとで大層違ふからである、女子も男子と同じく敵はある

殊に悪書生など横行する折柄、此心得がなからねばならぬと云ふとは明かであらう、多き婦人女子の中には車に乗り或は伴を連れて歩き、其男をして防禦せしむるものあらうが夫はほんの一部に過ぎぬ、假んばそれにしても椿事は多く咄差の間に起るものであるから矢張此自衛防禦の心得を要するのである。

要するに余の意見は所謂瑞典式とか表情体操などいふものは止めてしまへと云ふのではない、それと共に此自衛防禦の方法を教へたると云ふのである……一躰々操は云ふ迄もなく精神を練り身軀を鍛へるにあるのであるから、唯だ外見を立派にしきはれども観覧者を歡ばしむるが如き傾向が若しあるならばそは遺憾と云はねばならぬ云々

●疲労調査に就て 別項の精神疲労調査法に就きて文部省嘱託瀬駿河氏は語りて曰く

『余は上局の命に依り學生の精神疲労を調査する方法を取調中なるが其の結果の如何に應用せらるゝかは今茲に豫言し能ざる處也されど學生の精神疲労調査は學科程度が能く學生の心身に適當し居

るや否や將た又授業時間と休憩時間とは能く心理的生理的の配合を得たるや否やを測定する爲めの必要より起りたるものなり其の調査法として四個項目を掲げたるが第一項の計算法、記憶法、書取法、綴合法等はブルケルスタイン、エーピングハウスト氏等の實驗されたる處にして其の中の結合法とは故らに脱字誤字を綴り込めたる文と與へて其の填字正誤の程度に依りて精神の状態を測ることたり第三項にグリスバッハ氏の刺戟物云々はコンバスの如く兩端ある先きの尖りたる器械を皮膚に當て、其の知覺の強弱速度に依り同上の測定を爲すにして第四項は刺戟に依りて反應せる時間の長短を測定することなりと説明し更に『何種の運動にては精神の疲労を癒し得るが如く思惟するは大なる誤解なり讀書研學に精神を疲らしたる後ち直ちに強度の運動を試るは不知識の間に恐る可き危害を惹き起す原因と作る可し此の點よりする時は各學校の体操は輕度の學科と輕度の學科との授業の間に於て施すを適當とせん尤も唱歌の如きは難學科の後に課して可なるべし青

年學生の休養に缺くべからざるは安靜なる呼吸運動と溫浴との二つなり學科と學科との間の休憩時に他の運動遊戯を避けて適良なる安靜呼吸を行ひ夜間就寝前に於いて溫浴を執り斯くて怠るなければ青年の精神休養に補ふ處多大なる可し云々』と語れり記して教育家の参考に供す。

●折檻と教育賞と罰とは兒童教育上必要手段たるを失はず。然れども其れには自ら程度の存するものなるに角を矯めて牛を殺す淺薄なる無知の愚婦甚だ渺しからぬは概はしきこと、云ふ可し。千葉縣印旛郡志津村字萬崎友野倉吉養母よう(四十一)は平生其末子宇之助(二十)の腕白なるを心配しゆたる處聲の外に洩れざるやう自分の種やら此他種々の聲を移さず同地所轄裁判所の荒木判事書記醫員を隨へて臨檢し同時に加害者ようは引致せられ目下調査中なりと。

●下婢學校の成績  
新潟市婦人教育會にては下婢子守女等の品行陋劣なるを矯正する爲め去る三十年中戰時紀念事業の一ツとして同地女子高等小学校内に下婢學校を設立し毎週金曜日夜間二時間教員の報酬其他一切は有志の寄附により經營し來りしに其成績頗る顯著にして入學希望者漸次増加し目下在學者百八十人の多數に達し同地の下級勞働者等の風紀も次第に善良に赴きたりと云ふ吾人は此種學校の地方に益々盛ならんことを希望するものなり。

●二葉幼稚園の新築落成式  
野口幽香齋藤峯兩女史が労働者の爲めに設けたる二葉幼稚園は兼て四谷區元絞ヶ橋町六十六番地に新築中の處工事も落成したるを以て昨日其落成式を行ひ幼兒の遊戯を來會者に觀覽せしめたる筈

## 新刊紹介

● A R O 雜誌 每月一回 一冊金參錢

英語初學者の爲めに編せられたるものにて面白き  
ふ話や新聞の雜報、單語、單句集を初め翻譯問  
題、正誤練習問題及やさしき實用的會話などあり  
其他實用的文例あり外國少年のはがき寫眞版あり  
懸賞課題ありて小さな雜誌としては能く整ひたる  
ものなり。發行所は神田區表神保町一〇、東西社

● 女子高等師範學校の教授にして幼兒教育に就きて  
研究深き東基吉氏が實際の經驗より歸納して工夫  
したるものにて普通の日記と同様なる諸欄の外に  
睡眠の状況を記す欄あり日々子供の爲めにせる支  
出を得るには究竟の記録なる可し。卷首には當時及  
病時に於ける記入の方法及實例を詳述しあり参考  
の爲めには小兒の生理狀態や病氣、營養につきて  
精確なる記事あり教育上の注意につきては適切な

三十八

る箇條を摘要し、終に學校系統表や求年滿月

等を載せたり。

● 母のための教育學 定價金五拾錢  
群馬縣師範學校長羽田貞義新潟縣高等女學校教諭  
小澤錦十郎兩氏の合著にして應用教育學の一種なり、全篇を六部に分ち緒論に於て教育の意義目的必要より其區分を説き第一篇に胎教第二篇に小學校以前の家庭教育第三篇に小學校時代の家庭教育第四篇に小學校以後の教育を説き餘論には道徳及心理の概論並に智育訓育の方法を説述せり。全文談話體になり實例より近に取り極めて解し易からしめたれば眞には親の爲め適切なる讀物たる可し。



## 新聞と雑誌

### ●家庭と雇人 安部穂雄氏

昔風の考へは雇人といふものは、どうにでも此方の思ふ儘に使つてもよいものだと、一種の奴隸のやうに視て居りましたから、雇人を以て家族の者とば全く段階の違ふ人種かのやうな考へは、今日でも習慣的に多数の人の頭に残つて居りますが、かういふ考はまづ第一に取去つて仕舞はなければなりませんまい。日本では女中などを雇ひ入れる場合には、雇ふ方が雇はれる方の年や身元や人柄や、これまで雇はれてゐた家などを見質すのであります。アーメリカや英吉利あたりでは、反対に下婢などにのみ込まれうとする方が、雇はうといふ家の事情を取調べて、行つてもよいと思ふと、自分の方から様々の條件を提出します子供の扱ひは一切しないとか、日曜日の外に木曜の午後にも外出を約束したいとか、その外種々のこと云ひたて、それが承知なら雇はれさせうといふ態度です。雇ふ方が自分の氣に入つたものを雇ふといふのではなく雇はれ

る方が気にいつた家に雇はれてやるといふやうな風であります併しこんな極端な西洋の例に倣つて徹頭徹尾契約づくめに病人が出来たために、是々餘計な仕事をしたから何れ支金を拂へとか、また拂ふとかいふやうな使い方をするのがよいかと云ふと、雇主と雇人といふ區別はあるけれども、同じ家に生活してゐるもの同士が、かういふ冷やかな理屈づくめで相對しているといふのは、實に好ましくないことでありますから私はどうしても雇人を以て、自分の家族の一人として之を待つといふことでなければならぬと思ひます。群しく云ひますと、所謂他人の家に奉公に出る人などは、何れも教育の足らないものであるのですから、雇入れた時から自分の家族と思つて、主婦たるものは、唯に自家のために働かせる許りでなくそのもの、將來のために或は裁縫のみちを教へたり、また一通りの讀みかきでも教へる位にし、よい機會があつたならば嫁入の出来るやうにしてやる位まで行届きなもので、斯様な馬鹿な眞似をする人間とは思へない、夫から第十一師團の一軍曹も同一の所業をしたが、其遺書も先づ華嚴經に曰くと云ふ風に出て居る、此二者は其文面から想像しても相當に教育あり理性の力もある人の様に思へるが、遂に感情の爲に支配されて立つた、そこで余は理性の力

長く一つ所に職を奉じた人には、退職の後にもそれぐ恩給があるやうに、下婢にして誠實に自分の家庭を助けてくれたものには、他に嫁入りでもした後でも、一種の親戚同様に長く自分の家に出入りするやうにしたいと思ひます（家庭女學講義）

### ●旅行雑感 文學博士村上事精氏談

一昨十五日學士會で開かれた動物虐待防止會例會の席上で、文學博士村上事精氏は、今夏旅行中の所感を語られたり、今左に其の大要を錄せん

▲感情の力 七月六日の夜行列車で新橋を發し西下したが、瀧車中で新聞を見自殺者の多いとに驚いた、同月八日の大阪毎日に此種の報道が六つもあつたのである、其中に京都の高臺寺で情死した男の、十四になる子に遺した手紙の文面を見ると中々立派なもので、斯様な馬鹿な眞似をする人間とは思へない、夫から第十一師團の一軍曹も同一の所業をしたが、其遺書も先づ華嚴經に曰くと云ふ風に出て居る、此二者は其文面から想像しても相當に教育あり理性の力もある人の様に思へるが、遂に感情の爲に支配されて立つた、そこで余は理性の力

の情の力に勝つことの困難なるものなるを感じた次第である。

▲屋物好の稻荷 佐賀縣の鹿島といふ所に十日許り滞在した、此地は鍋島十郎の舊領地である、舊藩主が英明の君であつたので教育は中々盛であるが、爰に一つ意外に思ふたことがある、夫は三河の豊川稻荷と申乙ないと思はる、程繁昌な稻荷のとある一體稻荷の供物と云へば何處でも油揚と赤の飯に定まつて居るが、此處の稻荷は玉子とか鶏など腥さののみを供へる、此社の神主に招待されて種々御馳走になつたが、後で聞けば皆其のお下り物だと云ふのであつた……狐のお下りを食べたのは始めて、あら……思ひ起すと藩主は舊幕時代江戸に勤める折、宿所々々で必ず一行人數以外一人分丈餘計に膳立をしたものである、それは云ふ迄もなく此稻荷に供へるのであるが何時間にか残らず食べられて居るといふとであつた、是は稻荷が藩主の一行を護つたのだとのこと此の如くであるから信心者の多いこと、いふものは、非常なるものである……迷信といふもの、勢力は實に偉大なものではありませんか、

#### ▲佐賀學生の美風 佐賀は市街としては良

い處ではない、が教育は非常に盛である、隨て學校も人口の割合に多い、そは兎に角に學生は全く質素で、東京で見る様なものには居ない聞く所によると料理屋などに行くものがあれば、一同冷笑し仲間に入れないと云ふ有様である、そだ、現に余は市中につい一軒の東京でありふれた様な牛肉店を見なかつた、要するに佐賀學生は所謂

書生は草根を咬む底の事實を現はして居る此美風を永く續かせたいものである斯くて博士は、唐津で隣室に居た支那人の不潔に閉口せしと、或は下の關、丹波、京都を経たることを一言し、話頭一轉

#### ●文相の教育談

學生の品性陶冶に關する目的を達せんことは勿論教育上至難の事なるも其實今日の教育家中其青年生徒の道徳的品性を訓練することに關し極めて熱心なる幾多の博士並に教育あり此人々は勿論我が國本たる忠孝の二義を説き是に關する内外歴史上の事實より自己の躬行實踐を以て生徒を指導する者なり

▲智識の發達程度に及びて曰く『嘗て博士井上圓了氏の令弟で、哲學書院を計營し士井上圓了氏の令弟で、哲學書院を計營した人が云はれたとがある、舊籍の賣れ行き如何に依て其地方の教育程度を察し得る、

大體から云ふと（記者曰く北日本に就てのと）北陸は駄目で、東北は意外に好況であると、北陸地方は概して佛教の盛んな處であ

るから、そんな譯はなからうと思ふが、よく調べて見ると、これが事實であつて、北

陸は習慣的に宗教に熱心であるが、唯だ習

學校を通じて斯かる教育家即ち英米にて所  
謂メートル又はメートルンタル品位陶冶の  
教育家を惜て擧る多識多聞の學士教師等を  
招聘する結果は自然と學生の品性陶汰に缺  
くる所あるに至りたる等は思ふに今日の所  
謂學生風紀問題の起りし一原因には非ざる  
が云々

會員移動

轉居

福岡市博多中島町 森岡たか  
臺灣臺南西竹圍街 大室ゑい  
小學校官舍甲二十九  
入會

繁原妙子

福岡縣企救郡打綱村平井ともえ  
東京市牛込區南町二十八番地

會費領收(自明治三十九年八月二日)  
(至明治三十九年九月廿一日)

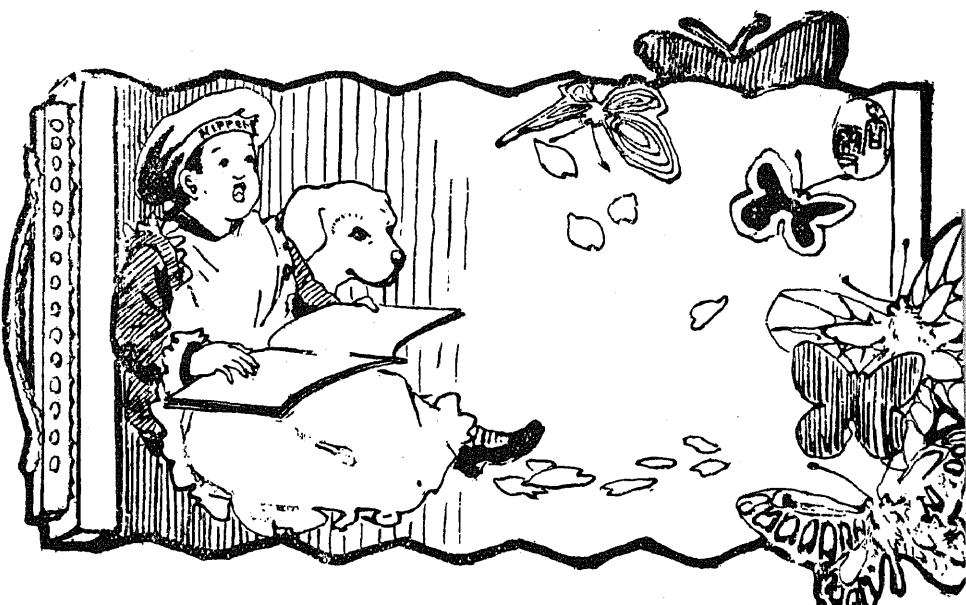
| 金額  | 拂込月日      | 姓名    |
|-----|-----------|-------|
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 近澤 岩吉 |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 瀧山 幸  |
| 三〇〇 | (自九月至十一月) | 松本そとえ |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 伊藏 さん |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 福岡 吳子 |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 山中 下枝 |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 水野 ます |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 長谷川りん |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 長與のぶ子 |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 長尾 みね |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 鳥居 しげ |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 清家寛次郎 |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 櫻井 光華 |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 伊藤 五姫 |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 小林 富子 |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 鳥薙 つね |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 柳井 鏡  |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 服部 たき |
| 三〇〇 | (自七月至九月)  | 安藤 たみ |

|     |          |        |
|-----|----------|--------|
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 酒井 冬子  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 松本 雜子  |
| 三〇〇 | (自八月至十月) | 山田 武田  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 武田 まつ  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 堤 いま   |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 關谷 いまと |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 白井 初枝  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 太田 よね  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 田坂 りつ  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 佐藤 むり  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 矢野 房代  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 大山 千代  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 箱石 孝藏  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 加藤 たけ  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 山田 春田  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 春田 稔子  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 松山 いつ  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 鍋島 いし  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 石幡 富子  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 吉田じゅん  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 加藤 常子  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 野口 ゆか  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 井川 いさ  |
| 三〇〇 | (自七月至九月) | 志村 たか  |

|              |        |                  |
|--------------|--------|------------------|
| 三〇〇 (自七月至九月) | 佐々木まさみ | 大堀清之助            |
| 三〇〇 (自八月至十月) | 淺田 つる  | 直井 みち            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 石井 國次  | 松本 まさ            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 神津 せん  | 池邊 千東            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 田中 ふみ  | 岩川 ひさ            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 幸田 龍   | 古市 幸             |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 吉武 しやう | 關根 みれ            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 藤並 いと  | 佐藤 つや            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 藤村 富壽  | 西川 茂             |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 西島 たま  | 橋本 茂             |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 岩本 藤吉  | 佐藤 徳二郎           |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 岩本 太郎  | 西川 徳二郎           |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 石川 よね  | 小谷野 かね           |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 平山 よね  | 平山 渡邊            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 市川 滉藏  | 戸坂 中和            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 保科 修   | 望溪 書屋            |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 中島 行徳  | 一、一六〇 (自八月至十年六月) |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 大野 朝比奈 | 一、一六〇 (自八月至十年七月) |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 片桐 くら  | 六〇〇 (自八月至十年一月)   |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 一色 一色  | 六〇〇 (自八月至十年二月)   |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 石山 安田  | 六〇〇 (自八月至十年三月)   |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 春惠 豊   | 五〇〇 (自八月至十年四月)   |
| 三〇〇 (自七月至九月) | 益井 幸   | 五〇〇 (自八月至十年五月)   |

|                   |        |
|-------------------|--------|
| 五〇〇 (自八月至十一月)     | 東儀俄 文  |
| 六〇〇 (自七月至十二月)     | 伊東 國三  |
| 一、五〇〇 (自八月至十二月)   | 若林 みつ  |
| 七〇〇 (自八月至十二月)     | 鈴木 こと  |
| 九〇〇 (自四月至十二月)     | 上野 かく  |
| 一、〇〇〇 (自八月至十年六月)  | 和久山 きそ |
| 一、〇〇〇 (自八月至十年七月)  | 林 玉子   |
| 一、〇〇〇 (自八月至十年八月)  | 遠山 あき  |
| 一、〇〇〇 (自八月至十年九月)  | 川端 繁子  |
| 一、〇〇〇 (自八月至十年十月)  | 中村 康子  |
| 一、〇〇〇 (自八月至十年十一月) | 大西 益子  |
| 一、〇〇〇 (自八月至十年十二月) | 小川 吉益  |
| 一、〇〇〇 (自四月至九月)    | 吉田 ハル  |
| 一、〇〇〇 (自四月至九月)    | 瀧川 かれ  |
| 一、〇〇〇 (自四月至九月)    | 大賀 福子  |
| 一、〇〇〇 (自四月至九月)    | 屋井 ノア  |
| 一、〇〇〇 (自四月至九月)    | 岩瀬 嘉代  |
| 一、〇〇〇 (自四月至八月)    | 川島庄一郎  |
| 二、〇〇〇 (自八月至十年二月)  | 伊東 節   |
| 五〇〇 (自七月至十月)      | 長尾 麗   |
| 五〇〇 (自七月至十一月)     | 福尾 キタ  |
| 五〇〇 (自八月至十二月)     | 西川 せき  |

## 三人皇子



或國の王様に三人の皇子がありました。兄さん二人は大層亂暴な方でありましたが一番小さい恭仁王と云ふ方は大層温和な懶好な方であつたのですから兄さん達は何時も弟をのけ物にして一所に遊びませんでした。或日の事二人の兄さんは何處かへ遊びに行かれまし

たが夕方になつてもあくる日になつてもとうとく歸つて來ません。そこで御父さんや御母さま初めみんなが心配して居ますので。兄さん思ひの恭仁王は

「私が探して参りませう」と云つて旅の仕度もそろそろはてしもなく出立され隣り國からだんくと方々の國々を探し歩いた末遂々或町で二人の兄さんに遭遇ひましたので大悦によろこび

「あゝもししく兄さんちやありませんか。母様や父様が大層心配して居らっしゃいますから早く御うちへ行きませう。私は兄さん達を探しに來たんです」と云ひますと兄さん達は思ひ掛けない處で弟に呼ばれたので一度はびっくりしましたが別にうれしそうでもなく。なあに。構はないよ。家に歸るよりは遊んで居る方が面白いのだ

よ。お前探しになんぞ來ないでもいいのに。早くお歸り」と云ひましたけれど恭仁王は兄さん達を連れて歸らなければなりませんからいつになく中々云ふ事をきゝません「夫れぢや。私も一所に遊びに行きませう」と云ひて後から付いて行きました。

さてそれから三人連でだん／＼と森の中を通り大きな川を渡つて行きますとそこに一つの蟻塚がありました。

兄さん一人は之を見て

やー、いゝ物があつた。破して中を見やうよと云つて旁にあつた石の片で叩き破らうとしますから恭仁王は急いで止めて

兄さんお止なさいよ、そんなひどい事をするのはさ」と云ふので兄さんも不省不生に止めて残りおしそうに見返りく。又少し行

くと或一つの大池の旁に出ました。處がそこには澤山の鳴が居て  
いかにも面白さうに遊んで居ます。二人の兄さんは之を見て

「あゝ甘さうな鳴だな。捕へて食へ様ぢやないか」と云つて追つかけ  
廻しましたが恭仁王が「可哀さうだから止しませう」と云ふので是も  
とうくお止めになりました。其れから又少し行くと今度は道旁  
の木の枝に大きな熊ん蜂の巣があつてたくさんのがしきりに何  
かして居ります。

兄さん達は之を見ると

「やー熊ん蜂！ 熊ん蜂は殺したつていゝだらうねー恭ちゃん。  
あの巣を叩き落して破して見やうよ。お前も手傳て御呉れな」と云ひましたが。

恭仁王は又云ふ事をきゝません。

私は。蜂の巣など破すのはいやです。そんな事すると蜂に刺されますもの」と云ふので兄さんも少しこわくなり遂々之も止めになりました。

其内だんく町近くに来ますと大層奇麗な宮殿がありました。處が不思議に此宮殿には誰も居ません。唯廄の中に石の馬が居る許りです。三人はドシく奥の方へ入つて行くと一つの部屋の前に来ましたが。錠が掛て居ますので窓から中を覗くと古ぼけたテープルの側に黒人が一人坐て居ますから二聲三聲呼んで見ましたが聞えないやうですから今度は戸を叩きました。すると頓がて立て来て戸を開けましたが。黙て手招きしますから付いて行きますと

立派な食堂があつてテーブルの上には出来たての甘さうな御馳走が澤山出て居ました。三人は大悦びで

「やゝ御馳走。甘いな」とさわぎながら腹一杯つめ込みました。

頃がて夜になると黒ん坊がまた奇麗な寝室に連れて行つて呉れました。次の朝起きて顔を洗ひ御飯を食べて居ると。また夕の黒ん坊が来て三人を石のテーブルの處へ連れて行きました。其石の上には三つの問題が書いてあります。

第一は此國の王様が林の中に眞珠の玉を一千個撒いて置いてあるから夫れを一つ残らず集めること。若し一つでも不足したら其人を石にしてしまふこと。

第二は大池の底に落ちたお姫様の部屋の鍵を探すこと。

第三は寝て居る三人のお姫様の中。誰が寝る時に蜂蜜を食べたかを當ることであります。

一番年上の兄さんが先づ第一の眞珠の玉を集めに行きましたが中々集まりません。其中に夜になつてしまひましたので遂々石になつてしまひました。次ぎには二番目の兄さんが出掛けましたが之も中々残らず集らない中に夜になつたのでまた。石にされてしまいました。さて其次には第三の王子です。精出して集めに掛けましたが中々持取らないのでがつかりして旁の石の上に腰を下して「あーあ、僕もまた石にされてしまふのかなあ」と泣き出しさうになつて居ますと。何處から出て來たか蟻塚の王が五千の家來蟻を引き連れて加勢に來て呉れたので忽ち残らずの眞珠を集めてしまひま

した。

さて第二の問題池の底の鍵は何うして探らうかと考へながら池の岸迄來ますと丁度其所に此間助けて遣つた鴨が居ましたから「オイ鳴！お前池の底にあるお姫様の鍵を探つて呉れないか」と云ひます。

「へー御易い御用です」と云ふかと思ふと直に池の底に潜ぐつて鍵を探つて呉れました。次には

第三の問題です姫の寝て居る所へ行つて見ると誰れもくも同じ様でそして口のあたりも奇麗ですから誰が寝る時に蜂蜜を食べたのか頓とわかりません。恭仁王は

「是は困ったなあ。何うしたらわかるか知らん。と頻りに考へ込んで

居る所へ來たのは前に破されそこなつた蜂の巣の女王です。

「若様何をそんなに御考へですか。私に出来る事なら御話下さいませ。御恩返しに働きませう」と云ひました。恭仁王は悦んで

「おゝ蜂さん。困った事があるのだよ。此處に寐て居る三人の中で誰が蜂蜜を食べただらう夫れを當てないと私も石にされてしまふんだからねーお前知て居るなら教へて呉れないか」と頼みますと「まあそんな事ですかそれは譯はありません。私が見て上げませう」と云ひながらブーンと飛んで行つて嗅ぎ回りましたが頓がてまた飛で来てあの一番年の若いお姫様が蜜を食べました。と云つて何處かへ飛で行つてしましました。さて此三つの問題が解けましたので宮殿の魔法はすっかりとけて睡て居たものは起き、石になつた兄さ

ん達や馬なども生き返り宮殿の中には大勢の人が入れる様になりましたので此國の王様は大層悦んで恭仁王を貰つて此國の王様にして御自分は田舎へ御隠居なさいました。めでたし／＼

### 私はもみぢ

ゆき子

私は御庭のもみぢです。私の生まれました時は恰も櫻の花のさかりでぽか／＼とあたかなよい御天氣の日でしたから皆さんはわざ／＼向島や小金井へ御花見に御出かけになりました御留守の時でした。それですから私が生れた斗りで眞赤な顔を天鷲絨の蒲團の中から出して躰はまだ扇の摺のやうになつてのびすに居りました頃の事は皆さん御存じなかつたでしやう。私は皆さんの聲をきゝましてはやくお友達になりたいあのさくらの花のやうになつて皆さんと御話が出来るやうになりたいものだと思つて居りましたの。

私の躰は奇態な躰、私はからりでわりませんあの枝に居る澤山の兄弟も、この枝に遊んで居ますあの姉妹も皆同じ事ですが皆澤山の囊がいくつも／＼ならんで重さなつ

てこのやうに皆さんの掌をひろげたやうな形をして居るので。そしてこのやうに紅い丈夫 そうな愉快な色をして居りますのは、囊の中へ紅の液が澤山はいって居ますからなのです。それで御日様ことに朝日や夕日にてらされますとますく紅く見え

けれども、つひ此間まではみどり色をして居ました。それは、躰の囊の中に緑の粒々が澤山はいって居りましたせいなので。まだその前には眞赤でしたが今、紅いのとはちがひましてその時は恰も生れました斗りて私の躰がまだ大きく丈夫になつて居りませんから、綠の粒があまり御日様にあたりましてはよくありませんので父様や母様が大事にして赤い液の着物を着せて下さいましたからでした。

だんぐ 大きくなりました時に赤い着物をぬがせて下さいましたがその時にはもう私の躰の囊の中には綠の粒が丈夫になつて一杯ありますともう躰の中の綠の粒が皆々空氣の中にある炭酸瓦斯といふ皆さんには害になりますものを吸ひましてそれをわけて皆さんに大事な酸素を出します。そしてその度毎に私の囊の中には澱粉といふ皆さんが召し上る

御飯と同じやうな性質のものをこしらへます事を教へて下さるのです。そして毎夜の宿題に澱粉を砂糖にかへまして翌の朝まで皆様に送つておかねばならぬ事があります。もうそれですから私共兄弟姉妹はなかよく一生懸命ではたらきまして朝日がきら／＼昇ります頃にはもう何も出来上がりましていき／＼と元氣よく皆さん暑さにもまけずに機嫌よく歸つて入らしやいましてあ、此の下はすゝしいナ一葉がよい色がすゝしいなど褒めて下さいます聲をきゝまして嬉しくつてます／＼はげみました。

夏休みで皆さんが鎌倉や大磯へ御出になりましたしばらくの間私は相變らず御日様の教を守りまして近ごろは澤山根の方へ時へが出来ました。それで御日様がもうよく勉強していふ事をよくきゝましたから御褒美に今までの緑の粒のかはりに紅い美しい露を一杯入れまして錦の着物を着たやうになつてよろしいと申されましたからそれでこんなに紅くなりました。

處が奇妙ですまあ近頃は私を大そう遠方からの方や方々のかたが御らむなすつてわの私が生まれました時の桜の花と同じ事だいやそれよりも美しいと云ふて褒めて下さいますがそんなでしやうかしら。今までのわたしの生涯はこんなものです。

# 神戸頌榮保母傳習所

## 生徒募集

○今や経験ある保母の招聘切りに來る依て

○當所保母志望者を募集す

○普通保母たるん者は二ヶ年修業

○主任保母たるん者は三ヶ年修業

○自費貸費生二途あり委細は郵便

にて聞合ありたし

工、エル、ハウ

神戸市中山手通五丁目頌榮保母傳習所

# 花の心

編輯主幹 佐々木信綱

第十卷第十(十月一日發行)

三浦文學士沼波學士齊藤泰氏の松波翁傳小金井喜美子女史のしのぶ草しぐれ女史の英女史のロオレエン詩佐々木信綱氏の古歌集講義石樽千亦氏の短歌をはじめ美文に韻文に材料豊富趣味津々たり猶本誌十一月號は通巻百號に相當するを以て紙數を増加し特に紀念號發刊すべく競點課題の短歌入撰の諸氏には賞品を贈與すべし委しくは本誌に就て見よ

定價一冊金拾三錢半年金七拾五錢、

(郵稅共)

東京日本橋區本石町一ノ一

竹柏會出版部

●ふ乞を記附御旨るた見を(供子と人婦)は節の文注御●

學習院女學部長 下田歌子女史新著

# 女子の修養

廿世紀女子教育の生粹  
新家庭經營整理の寶鑑



頗洋裝全冊  
正價金七拾錢  
郵稅金八錢

福岡日日新聞批評

此書は著者が女子の修養に資すべき教訓を感じる折々書き止め置きたる隨筆體のものを今回刊行するに當り順序よく目次を定めたものなり。章を分つと十、少女の心得、小婦の心得、母親の心得、後婦人の心得、繼母と繼子と、姑母と小姑、婢女の心得、都會の女子と地方の女子と、教ふる人の心得へらるゝ人と、應接と交際と等之れなり。由來著者は多年女子教育に從事し女子の性情と女子訓の経験とを知悉し、輓近の思潮に接觸せる博學多能の秀才なるは人の知る處、此著亦著者が最も得意とする女子處世の秘訣を述べたるものなれば、吾人は此健實なる著を世人に紹介するを喜ぶものなり。其引證や該博其比喩や適確、其思想やや意練るやてたり。ス彩畫摺込頗る。

此等堅くなゝる教訓を述ぶるに雅馴温籍なる才筆を以てしたれば好個の女子作文參考書として、

而して其文章を咀嚼し、流暢にして華麗なり紙數總じて一百八十五頁總クロス彩畫摺込頗る。

(定價七十錢 東京京橋南大工町弘道館)

發

兌 元

東京京橋區南大工町一番地

弘 道 館

電話本局二八四〇番

賣店は全國到處有名の書籍有りあり

後付の二

# 小兒科専門 小原 賴之 先生校閲 女子高等師範學校教授東基吉先生編著 新案育児日誌

(舶來上等紙摺)  
洋裝美本紙數凡そ四百五十頁

定價四十錢(總クロース) (全一冊)  
特製五十錢(脊皮洋裝) (全一冊)  
郵稅各八錢

◎子ある家庭には必備の寶典

本書は東先生が從來我國にされたるものにして、完全なる育児日記のなきがために世の父兄が鬼角子供の日記を記し行くを歎ぜらるゝの餘り多年考案の結果今回新に考案せられたるも記入の方法の簡便なるが附錄兒童身體發育表、小兒の脈搏、體溫、齒牙、睡眠、病氣、病室、營養、食物の主成分一覽表等に至りては、小兒科専門小原先生の指示と校閱とに由實驗的育児法として又從來良書といふべく其他教育上の注意子どもある家庭には是非とも備へざるべく其の如きも至れり盡せりといふべし。本書は最も適切文明的なる。

注意!

本書の定價は殆んど白紙の代價に等し。白紙の代價を以てして有益無比の本書は購求せらるべきなり

發兌元

東京市京橋區南大工町一番地

弘道館

(電話本周二八四〇番)

●ふ乞を記附御旨るた見を(供子と人婦)は節の文注御●

半年冊六  
年分郵稅共三十三  
六十錢見本進呈  
呈

# 明治家庭の振替貯金番號六六五

行發日一月十號拾第二卷第

口座

- ▲これはかあちやんに……  
繪
- ▲子供の氣質の見分け方  
口
- ▲の標準は如何に……宮田修  
嘉悦孝子
- ▲汽車轉覆の災難に遭いての所感  
村上白紅
- ▲虐められる子と其親の注意  
トトル安藤省吾
- ▲なぜにシャツはまだ着てはいけないか  
ドク
- ▲新世の失敗と五年目の主婦  
子供の育て方 質問隨意
- ▲高尙優美で作くりやすき婦人の内職  
▲頭の塊
- ▲赤い髪の子  
恥かしがり
- ▲ミルクのぬめ方  
▲溢汗の子
- ▲頭の塊の子  
▲ふた子の強弱
- ▲雨を恐れる子  
▲草實の興へ時
- ▲麝香蠅豆の栽培法  
岐阜縣農事試驗場長  
宮田孝次郎  
故飯塚曉霞
- ▲評判な健一
- ▲よろづ問答(質問隨意)  
實用はがき文(懸賞募集)
- ▲馳走天狗  
立花忠子、安藤忠子、鶴田百合子  
當撰者
- ▲獻立問答(懸賞)  
内田魯庵夫人  
米國ケート夫人  
岡崎子爵夫人  
仙臺高橋丸子  
仙臺高橋本子  
前生淺草藏  
江口喜代子  
泰徳順廣柳  
壽柳氏  
小川の一女  
無名氏  
子子子子子子治子
- ▲可愛い話  
五百に尤もなる言ひ草につき讀者の裁判を請ふ  
雜錄(投書隨意)

後付の四

東京牛込納戸町六行發所明治家庭の社

●ふ乞を見たる旨(供は婦人と子)御附記文注の節

# 消化年難治の慢性胃病を強壯健全にする靈藥

根治し

も皆一時の苦痛と

頗る多しと雖と

を凌ぐ制酸薬

(即ち重曹、マグ

ネシヤ苦味薬

方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効薬を配合し百方實驗其奏效

顯著なる確認發賣せし最も進歩せる完全なる新薬にして數年難治の

頑固慢性胃病にも根治

本より

なる

ならしめ食欲を促進し便通を快くし氣力を莊にし精神を爽快活動を

する空前の完全最新薬なれば從來種々雜多の胃病薬を用ひて効なく多く

年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本剤を服し病根を斷絶し無病強健

の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢炎症は參劑にて根治確證する

本剤は胃腸を痛

め子宮を害せ

す如何程長き月

經閉止も心す忽

ち快通流

する

●ふ乞を記附御旨るた見を(供子と人婦)は節の文注御

香川縣博覽會に於て金牌を受領す内國製  
產品評會に於て一等褒狀受領第五回内國  
博覽會に於て褒狀を受領す

商標登録 蜂印靴墨

優等深大金色罐入



一本品は  
價の如き感高  
ありと雖も  
品質良好に  
比較的廉價  
罐入なれば  
本品は靴皮  
澤に用水む  
且を柔軟に  
又耐久せし  
顯する  
を美なる  
少量をし  
られれば  
光直使

優等鷹印靴墨本舗  
松崎商店  
東京浅草區  
諒訪町  
特電話下谷千八百十八番

む含を料香のらばとレミスと香麝  
小判石鑿  
七五二一電本賣發堂實三町本京東  
二大十錢袋  
十二錢

# 新刊書々の好評

|                                    |   |   |  |  |  |  |   |   |                                   |
|------------------------------------|---|---|--|--|--|--|---|---|-----------------------------------|
| ○文學博士<br>姉崎正治先生著<br>全一冊價一圓<br>郵稅十錢 | ○東洋大學講師<br>文學士<br>北澤定吉先生著<br>洋裝四六判形美本<br>正價九十九錢<br>郵稅十錢 | ○文學士<br>北澤定吉先生著<br>洋裝菊判形全一冊<br>正價九十九錢<br>郵稅十錢 | ○文學士<br>北澤定吉先生著<br>洋裝菊判全一冊<br>正價九十九錢<br>郵稅十錢 | ○伊藤銀月君著<br>北澤定吉先生著<br>洋裝菊判新著<br>正價金七十錢<br>郵稅八錢 | ○伊藤銀月君著<br>北澤定吉先生著<br>洋裝菊判新著<br>正價金七十錢<br>郵稅八錢 | ○男爵金子堅太郎先生著<br>賜天覽<br>菊判全一冊<br>正價四十錢<br>郵稅四錢 | ○日本教育の將來<br>賜天覽<br>菊判形全一冊<br>正價金七十錢<br>郵稅八錢 | ○文學士<br>遠藤隆吉先生著<br>菊判全一冊<br>正價四十錢<br>郵稅四錢 | ○虛無活談主義<br>菊判全一冊<br>正價四十錢<br>郵稅四錢 |
|------------------------------------|---|---|--|--|--|--|---|---|-----------------------------------|

○文部省視學官農學士針塚先生共著(密圖十數)  
○農科大學助手山崎德吉先生著(個插入)  
養蠶教授指針  
價正二十五錢  
郵稅四錢

|  |  |   |   |   |
|--|--|---|---|---|
| ○伊藤眞一郎先生著<br>長壽論<br>菊判形全一冊<br>正價廿錢<br>郵稅四錢 | ○白土千秋先生<br>阿部清見先生共著<br>國定算術教材資材<br>上卷五十錢下卷六十錢<br>郵稅各八錢<br>洋裝菊判<br>全二冊<br>正價三十錢<br>郵稅四錢 | ○學海憲士著<br>秘決受驗術<br>ハイカラ形全一冊<br>正價金三十錢<br>郵稅四錢<br>△受驗者は速に一讀せよ<br>横井時敬先生著<br>正價三十八錢<br>郵稅四錢 | ○農學博士<br>元良勇次郎先生著<br>農業振興策<br>菊判形全一冊<br>正價三十錢<br>郵稅四錢<br>△受驗者は速に一讀せよ<br>横井時敬先生著<br>正價三十八錢<br>郵稅四錢 | ○文學博士<br>元良勇次郎先生著<br>心理學綱要<br>菊判全一冊<br>正價金三十錢<br>郵稅四錢 |
|--|--|---|---|---|

發行所  
東京電話二局本番  
大八工四〇番  
南橋二局本番  
東京電話二局本番  
大八工四〇番

# 家庭に於る少年の一唯讀物

女子高等師範學校教授東基吉先生著

## 日曜讀本

插畫四十餘個  
菊判形

少女雜誌曰くこれわ、幼年用の讀本である。娛樂の内に讀書力と知識とを養う仕込に出来て居る。多趣味で西洋風な、好い本である。

▲未曾有の珍本である

## 強い日本

全一冊 楊口勘次郎先生著  
插畫二十數個  
正價金十錢郵稅四錢

## 日本の覺悟

全一冊 正價金十錢  
插畫十數個  
頗ル美本

正價金十五錢郵稅四錢

▲戰勝紀念少年  
の有益なる讀物

## 芝居戦役征伐

插畫三十餘個  
菊判形

全一冊 正價金十錢郵稅四錢  
通一蘭林先生作 ○宮川春汀畫

## 歴史入鹿退治

菊判形

全一冊口繪插畫六葉插入價十五錢郵稅四錢

△これまで類のない珍本である  
△家庭でも學校でも芝居が出來て面白き本

## 米の話

全冊

盛岡農林學校教授農學士吉村清尚先生著  
國觀つ木月畫口畫

△菊判頗ル美本口繪十數度採色石版插畫十數個  
定價十五錢

後付の八  
電話東京本局番号一四八二番地

## フレーベル會規則

## 會告

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルナ以テ目的トス

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ

篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ輸出スペシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達セんガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一 總會 每年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話保育參

列品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス會日ハ

常會 每年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育

ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス

組合會 會員中特に或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但

シ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

雜誌發行 每月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス

前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一 會長 一人 會務ヲ總理ス

幹事會 若干人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

評議會 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條 主幹 會長ノ特選トス

第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ヶ年トス

但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス

第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス

第十二條 本會ハ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトア

ルコトヲ得ズ

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから其割合で何ヶ月分かを纏めて東京京橋區南大工町一番地書肆弘道館へ御送金の上本會へ御申込下さい、さすれば雑誌は該館より御送付致します。會員にならずに雑誌丈け読みたい方は左の割合で矢張全館へ御注文下さい。

明治廿九年十月一日印刷  
外に郵稅一冊五厘づゝ

同  
年十月五日發行

編輯者兼

印刷者

發行所

轉載

禁

印

刷

元

弘

電話本局二八四〇

東京市京橋區南大工町一番地  
主計會  
下  
東京市田中區錦町一丁目十九番地  
日本  
本  
社  
道  
本  
社  
藏  
東京堂

大賣捌  
廣告次

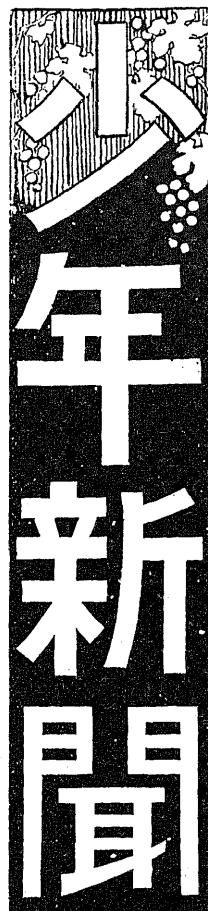
東京堂

弘業社  
大阪盛文館

東海堂

(明治十九年十月五日發行) (毎月第一回五日發行)

の一本日



菊四倍大六頁定價參錢五厘郵稅五厘

アルミニューム  
最新印刷機械

三色刷寫眞版木版挿畫

● 每土曜日發行

三色刷書十五個以上寫眞六個以上木版畫六個以上鮮麗高佳

少年新聞定價表

十三部(二ヶ月分)

前金五拾錢

廿六部(半年分)

前金九拾五錢

五十二部(一年分)

前金壹圓八拾五錢

以上月極郵稅共

東須 草番 淺二 市町

● 本紙は我が國少年新聞の創始也

● 師表なり願くば一覽の榮を賜へ

智識欄學界の大家執筆

内世界雜報  
内地雜報  
各種新聞

著名記者擔任

繪畫 中澤弘光氏 小林鐘吉氏 每號執筆せらる

社聞新年所發行